
草原の歌に花言葉を

かがみ豆腐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

草原の歌に花言葉を

【Nコード】

N 6 2 7 3 W

【作者名】

かがみ豆腐

【あらすじ】

自らの意思により、奴隷としての環境から逃げ出すことに成功したカルル。彼は王都を目指して草原を渡ろうとするが、その途中で狼に襲われてしまう。

そんな窮地に現れて救ってくれた者が居た。騎士はアカシアと名乗り、王都の追っ手から逃れるために荷馬車を貸してほしいとカルルに懇願する。

助けられた礼と、さらに幼き日の再会に感激したカルルはそれに快諾するが、それはつまり逃げ出してきた村をもう一度通りかかると

いう意味でもあった。

しかし引き返してきたカルルたちが目にしたのは、焼け跡と化したかつての村だった……。

序章（前書き）

だれだって幸せになりたいのです。奴隷も、英雄も。

そのために逃げて、時には戦います。

それぞれが理想を求めて現実に向かうのはどこの世界も変わりません。

これも、そんな大海の中の一つのさざめきのような物語です。

誤字、脱字、わかりにくい描写や比喩表現など、おや？ と感じられた部分がありましたら指摘して頂けると幸いです。

序章

痛いほどに冷たい雨が降っていた。

そのおかげで人目はなく、家から出る者がいないのは幸いであった。誰にも見られたくない。

長い付き合いだった手枷は、足元に倒れる男の持っていた鍵束で外れてくれた。

家から運び出した荷物を手早く荷馬車に積み込むと、彼は長年世話をさせられてきた馬に囁きかけた。

「逃げ切れると思うかい？」

ぶる、と馬は嘶いた。彼が喋ると必ず相槌を打ってくれる。

「……行こうか」

彼が軽く手綱を打つと、ゆっくりと木の車輪が回り始めた。

草原の出会い

緑の海。……と言うそうだ。実際の海を見たことはない。

見渡す限り、視界には草原がどこまでも広がっている。

肌を焼く日差しは暑いくらいだが、風がなんとも心地よく吹いている。秋は近いらしい。

緑色をかき分けた目の前の一本道は朝からずっと変わらないが、景色の中で太陽だけが段々と低くなってきていた。

自分がいなくなったことで、今ごろ村は大騒ぎだろう。

だが、もうそんなことはどうでもいい。あんな村に縛られることがなくなり、ようやく自分は自由を手に入れたのだから。

ふと、空を仰ぐ。

青と白だけの空を、こんなにも美しく綺麗だと感じたのはいつ振りだろうか。

その天井が赤みを帯び、太陽が地平の境に沈んでからはあつという間に気温が下がり始めた。

——そろそろ夜の準備をしたほうがいいのだろう。

なにぶん旅は不慣れなのだ。漠然とした不安があつてなかなか気楽にはなれない。

こんな時にはどうする、程度の知識があるだけで、具体的な経験というものはまったくない。

「冷えこんできたな……」

苦労してようやく火がついたところには、もう空と雲の判別が怪しいくらいにまで暗くなってしまっていた。

「これだけだもんな……。さすがに心もとないよなあ」

一頭の馬が余裕を持って引ける大きさの荷馬車。これにカルルのすべての持ち物が積み込まれている。

干した肉とライ麦の黒パンを齧って腹を満すと、カルルは毛布を掴んで荷台に上がり、寝転がって星空と向きあった。

「綺麗だ……」

それ以上の言葉はなく、そういえばと体を半分起こした。

「火、大丈夫かな。離れてるから燃え移りはしないと思うけど……大丈夫だよな」

焚火の火は獣除けになると聞いたことがある。薪はこの草原では貴重だが、なるべく火は絶やさないほうがいいだろう。

また横になって目を閉じた。すると耳が冴えるのか、風の音も普段より聞き分けられるような気がした。

「……………」

今のは何の音だ？

風の音にまぎれて一瞬、何かを感じた。音ではなかったのかもしれない。

再び体を起こし、月明かりしかない薄暗い草原を見渡した。

「……気のせい、かな」

結局何も見つけれられず、やがて睡魔に負けてカルルは深い眠りに就いた。

「……………」

今の音はなんだろうか。

さっきも同じようなことがあった気がする。

だが、確かに今しがた、獣の鳴き声のような……。

——強く砂利を踏む足音。

次いで、獣の悲鳴。

「——っ！」

カルルは跳ね起き、周りを見た。

誰かが、誰かの背中が見える。暗くてよく見えないが、何をしているのかはすぐにわかった。

ようやく目が暗闇に慣れてくると、三頭の狼がそこにいた。頭を低くし、唸り声をあげてその人物を遠巻きに威嚇している。

自分なら早々に腰が抜けてしまう状況なのだが、その後姿の人物は臆することなく凜と拳を構えていた。怖くはないのだろうか。

そして、あつという間もなく一頭の狼が飛び掛って——と思った時には、すでに引いていた拳でその鼻先を迎え撃っていた。

——すごい。

思わず見惚れていた。

しかし次の瞬間に別の狼が襲い掛かり、その者の太ももに獣牙を喰いこませた。

「——っ」

好機とばかりにもう一頭も続き、わき腹にぶらさがるように食らいつく。

悲痛な声に我に返ったカルルは、何か武器になりそうなものとはと荷台を見渡し、それを見つけた。

長剣。

護身にとカルルが前の家から持ち出したそれ。未だろくに素振りすらしたことがなかった。

……だからと言って、いざ実戦となるとこんなにも重く感じられるのだろうか。

これを持って野生の狼に挑み、その毛皮を切り裂き、肉を断つ。怯えているのが自分でもよくわかる。

怖い。狼は怖い。そんなのと命を懸けて戦うのはもっと怖い。自分は何んと臆病なのだ。このままでは……。

「——っ!!」

その結果にこそ、カルルが一番恐怖を覚えた。

「……う、……わあああああっ!!」

暗闇で鈍く光る長剣を握り締め、荷台を飛び下り、地面を蹴った。そしてすぐにその瞬間は訪れた。

突然の雄叫びに狼はカルルの存在に気づいたが、獣の性が簡単には咬みついた顎を離そうとはしなかった。獣の黄色い目がぎよりと彼を睨み付けるが、それに怯むほどの思考の余裕はもう残っていない。

ない。

——たとえ剣としては使えなくても……！

ドゴツ、というどちらかといえば打撃のそれに近い音のあと、足に咬みついていた狼が白目をむいて倒れた。

まさか本当に倒れるとは、とカルルが驚いている数秒の隙にもう一頭の狼は離れてこちらの様子を伺っていた。

「……っ、君……」

「え？」

よく通る、澄んだ声だった。それ以上の感想を述べることに意味はなく、狼に目を向けたまま返事をした。

「だ……大丈夫ですか？」

大丈夫なわけがないだろう、とわかっていたがそう言うしかなかった。

カルルから詰めれば二秒か、狼からなら一瞬で詰められるであろう間合い。

不意打ちならばともかく、まともにやりあつて勝てる可能性などない。

「くそ……」

「剣を——」

「え？」

「剣を。私に」

その騎士はいつの間に隣に立っていたのだろう。

ちょうどその時、すうと月の光が雲の隙間から闇の中へと注いだ。

その美しさに子供のころに見た天使が光の中から降りてくる絵を思い出す。

淡い月光に映える長い金色の髪。短く切り詰められた甲冑は傷こそ少ないが使い込まれた歴戦の貫禄がある。そしてその凜とした翡翠色の双眸。……美しい横顔だった。

思わず息を呑んだカルルは女性の言葉を忘れてしまっていた。

「剣を。私にまかせてくれ。きっとあれを倒して見せよう」

我に返ったカルルは狼に注意をむけたまま慎重に剣を渡した。まともに使われたことなどない真新しい剣を見つめて、一言。

「——少年。逃げることを恐れた臆病者のことを、人は英雄と呼ぶのだ」

その時、弾けるように鋭く——狼が跳び上がった。

一瞬の出来事だった。

薄いマントを翻らせ、まるで舞踏でも踏むかのように騎士はそれを真つ二つに斬り伏せていた。

「……私は成り損ねたがな」

夜風に吹かれて

「うむ、美味しい」

さっきの貫録はどこへやら。

妙齡の女性特有の愛嬌に満ちた、至福の表情でそう感想を述べると騎士はまたひと口と狼の肉を頬張った。

聞けば名はアカシアと言うそうで、仕留めた狼の肉をたき火で炙っては口へと運ぶ彼女からはなんとも旅の経験が伺える。

「しかし危なかった。陽が落ちて草原をさまよっていると、遠くに火の光を見つけてな。私がたどりつく前に火は消されてしまったのだが、どうも獣の気配を感じたのだ。放っておくわけにもいかず、というわけだな。君が目覚めたのはそれからだ」

どうやら自分が寝ている間に狼に襲われかけていたらしい。それを彼女が助けてくれたということだそうだ。

「本当にありがとうございます。それと……、——すみません」

「? どうしてカルが謝る」

「……もつと、……」

思い返すと情けなくて声がすぼんだ。

「ん? なんだ」

「もつと早く僕が出ていれば……アカシアさんは怪我をせずに済んだはずです……」

するとアカシアはふつと鼻から音を出し、水袋からひと口飲んで穏やかな口調で言った。

「カルのせいではない。それに君は私の手当てをしてくれた。それで十分さ」

小さな鎧の隙間から服を捲し上げるとわき腹が見えた。カルルの着替えを裂いた布が巻かれており、手当てをした時の柔らかい感触が脳裏に甦ったカルルは気恥ずかしくなって目を逸らした。

「ん。どうかしたのか?」

「い、いえ……なんでもないです」

「ふむ……。――カル」

「は、はい」

「君は今、いくつだ？」

「へ？」

「年はいくつなのかと聞いている」

「年……は、十七です」

「私と三つしか変わらないな。君は敬語で話すのに慣れているようだが、もつと堂々としたらどうだ？」

「……そう、ですよ……。気を付けます……」

慣れているのではなく、今までそれしか出来なかった。だがしかしそれを彼女に言っても仕方がない。なにより自分について詮索を受けたくないのだ。

「まあ好きにすればいいさ。ところで」

「はい」

「私も荷台で寝ようと思うんだが……構わないかな？」

豪快な欠伸だった。せめて手で口を覆うくらい、と言っても恐らく無駄なのだろう。

「え……ええ」

「ありがとう。では、話の続きはまた明日な。おやすみ」

一方的に話を切ると騎士は荷台によじ登っておもむろに甲冑を脱ぎ捨て、寝転がるとすぐに静かになった。

「……ふう……むにゅ」

悪い人ではないのだろう。……たぶん。

ぱちぱちと燃えるたき火に残っていた木切れをすべてくべ、カルも眠ることにした。

「でもなあ……」

それがいくら小さな荷馬車で、多少の荷物が積んであるとはいえ、足を伸ばして寝るのには十分な余裕がある。

だが、そこに二人ともなれば話は別だ。

猫のように身を丸めて横になっているアカシアの隣には、カルルが寝るにはなんと微妙な隙間が空けてあるのか、……それとも空いているだけなのか。

後者だった場合を考慮すると、ここに無理やり体を押し込むのは流石に遠慮するべきであろう。

「……寝るんじゃないのか？」

不意に目だけ開いてそう言われた。

「……もつと寄ってくださいよ」

「そうか、たしかに冷え込むからな。君がそう言うのなら」

「いや、ちよつと、逆です、そっちに詰めてくれって意味です」

「ああ、そういうことか。……ん、これでいいか？」

「はい。……それで、アカシアさん」

「なんだ？」

「さつきあなたが話の続きは明日って……。でも、明日すぐに出発するつもりなんですけど」

「ああ、私もそのつもりだ」

「いえ、ですから。いつ、その話をするんです？」

「？ 道中でゆつくりと話せばいいと思うのだが」

「……ああ、アカシアさんも行先は都の方角でしたか」

「なに？」

「え？」

「王都に行くのか？ カルは」

「え、ええ」

「……まいったな」

のそりと起き上がるとアカシアは頭を抱えた。

「あの……僕が王都に行くとまずいんでしょうか」

「いや。カルではない。私が……。——ふむ、やはり今話し合ったほうが良さそうだな」

話し合い、と言いながらもアカシアの口調と眼つきには穏やかではない色がこもっていた。

英雄

一体、どれほどの敵を切り伏せてきたのだろう。

ずっと生き延びるために必死だった。

自分を殺しに来る敵が、ただただ怖かった。

名も知らぬ相手に剣を振り下ろすうち、いつしか『戦神アカシア』などと呼ばれるようになっていた。

それが使命と信じ込むことで、命を奪うことにすら躊躇しなくなったのはいつからだろう。

……半月ほど前、ある国で権力の頂点だった国王が戦死し、その後を王子が継ぐことになった。

まだ若い王子は腹に一物を抱えた老人の言葉を鵜呑みにしてしまい、その国の英雄として讃えられていた者を処分することに決めたしまった。

それ自体はあまり珍しい話ではない。

未熟な跡継ぎが王たる資質を養うために失敗を重ねるのは自然なことだ。

だから、王宮に仕える親友にそれを告げられた時も大して驚きはしなかった。ああ、やはりそうだったのか、と。予感はしていた。

今の王に弁明の声は届かない。

だが、こちらとてそんな理不尽に殺されるつもりも毛頭ない。

ならば逃げよう。自分にはこの生き方しかできない。

幸か不幸か、物心ついた時には家族はどこにも居なかった。しかし、自分が姿をくらましてその幫助を問われないよう、忠誠を誓ってくれた部下を裏切る必要があった。

あの、何事にも生真面目だった部下。

自分の娘ほどの年齢の相手に、彼は気を失うまで殴られることも厭いとわなかった。

何度も殴打され、痛みを叫ぶのは部下のはずなのに、自分ばかり

が泣いていた。

そして、夜中に門兵が全員居眠りをしている隙を突いて門をくぐった。

寝言と言いはる彼らに独り言の別れと礼を残し、夜の草原へと馬を走らせた。

死神とまで謳われた英雄が、死刑を前にして逃亡。

後ろ指などいくら刺されても痛くも痒くもないが、同じ釜の飯を食った連中との別れはやはり辛かった。

逃走劇は成功したように見えた。自分自身、安心して馬に気を遣う程度の余裕も持ち始めていた。

だが、若い王は早く実績を作りたいかったのか、裏切り者の処分に特に力を入れて動いたらしい。

追手は予想よりもずっと早く追いつき、馬を射止められてしまい応戦を余儀なくされた。

戦いには勝利したものの、自分は剣と馬を失い、追手の者も死ぬ間に愛馬を道連れにした。

結局、自分の足で草原を行くしかなかったのである。

捕らえられれば裁判もなく処刑されるだろう。あつけないほどに生き残るには王国が滅びるか、追手の及ばない他の勢力圏まで逃げ切るしかない。

「——アカシアさん？ どうしたんですか、急に黙って……」

「……カルル」

「はい？」

「頼む。どうしても私は王都から早く離れたいのだ。そのために……この馬を貸して欲しい」

これほど必死に人にものを頼んだのはきつと初めてだ。だが、言葉を濁すカルルに胸の奥が重くなる。

「……頼む」

「……」

そう簡単に頷いてくれるとは思っていなかった。だからといって

手荒な真似をするのは本当に最後の最後にしたい。

そんなことを考えているうちに、ふと疑問が浮かんだ。

逆に、どうして彼は王都を目指すのだろう。理由もなく人の頼みを無下にするような性格には見えない。よほどの目的があるのだろうか。

「……なあ、カル。そういえば聞いていなかったが、君はどうして王都に？」

「――」

より一層カルルの表情が強張った。それは何か、彼の触れられたくないモノに触れてしまった反応。

「カル？」

「……僕は……」

俯いて服の裾をぎゅっと握り、消え入りそうな声でカルルは言いかけた。だが次第に顔が青ざめ、ふつと。

「カルルっ！」

少年は気を失って倒れてしまった。

奴隷

——くさい。……嫌いなにおいがする。

朝起きて一番初めに抱いた感情は『不快』。昨日も、今日も、明日もずっと。

「いつまで寝てやがるっ！ さつさと羊の世話をしろガキ！」

なにも言い返さない。言い返せないんじゃない。無駄なことをしないだけだ。

「つたく……使えねえ奴隷だ。たまつたもんじゃねえよ」

愚痴を溢しながら男が馬小屋から消えると、カルルはもそもそと起き上がって背筋を伸ばした。

そして、ため息。

家畜の糞尿の臭いが染み付いた寢床が、今度は仕事場になる。

仕事場と言っても、給金を貰って稼いでいるわけではない。馬車馬のように使われ、怒鳴られ、腹を蹴られ、いつしか夜になっている。

好きでこんなところに居るわけではない。この村は人さらに遭った子供が連れてこられ、様々な用途の奴隷として取引されてから使役される。

そして自分と同じような境遇の者は皆、目が死んでいる。最初はなんとか脱出しようと頑張るのだが、口数が減り、次第に表情が消えていき、瞳から光が失われて虚ろな目をするようになっていく。

自我を失って本当に家畜と同じになる者。悲観して泣きながら体中を嚙んで死のうとする者。

今では見ただけで、その子供があとどれくらいで諦めるかがわかるようになっていた。

誘拐されて七年も生き長らえた奴隷は初めてだと、誰かが話しているのを聞いた。

きつと、自分は運が良かったのだ。

すごく嫌なことをされても、その気持ちを和らげてくれる『抛り所』が自分にはあった。

それのおかげでどんなに辛くても歯を食いしほることが出来た。このオカリナを胸に抱くだけで、思い出が嫌なものをひと時だけ忘れさせてくれる。

吹くと持つているのが知られるから、毎晩指だけ動かしたりして思い出に浸った。

名前も知らない少女の笑顔。

お互いに吹きあつては笑いあつた記憶。

それだけがカルルを認めてくれた。どんなに軽蔑されても、それがあつたから聞き流すことができた。

その夜は珍しく、酒に酔った家の主人が鼻歌を歌いながら馬小屋にやってきた。

それつが悪く言っていることは半分ほどしか理解できなかったが、どうやらこの家の奴隷は長持ちだから買い替える金がかからなくて羨ましいな、と誰かに言われたそうだ。それと酒の酔いも相まってか「褒めてやろう」などということらしかった。

……なんとくだらない。

最初はあまりの馬鹿馬鹿しさに、呆氣に取られて舌の回らない男の話を聞いていた。

だが、ふと気づく。そして短い葛藤のあとに覚悟を決めた。

カルルは立ち上がると両手を繋ぐ枷の鎖を男の首に巻きつけ、交差させながら思い切り締め上げた。男の反応は鈍く、思ってもみなかったほどに非力だった。

ろくに体を動かすことがなく、よく肥えた首の肉に錆を擦りつけながら鎖が深く巻き付く。

「あ……やめる、やめ……おっ……やめえあ——」

あのふんぞり返って大きく見えていた奴が、実際は自分よりチビの禿げ頭でしかなかった。

——こんな奴に……っ!!

自分の両手首を背負い込み、肩越しに力任せに引き上げる。
カルルが本気を出しきるまでの間、気持ちの悪い静寂があった。
そして、蚊の鳴くような断末魔を耳元で聞くと、腐った木の枝が
折れるような感触を得たのだった。

「——っ！」

勢い良く体を起こし、隣にいた誰かに掴みかかっていた。

「はあっ……はあっ……！」

ようやく自分が寝惚けていたことを理解してアカシアの体から手を離れた。抜きかけた短剣を収めると彼女は言った。

「かなり、うなされていたぞ。怖い夢を見たんだな」

「夢……？ ……いや、……夢じゃない……」

「どうした？」

「………」

忘れることはできるのだろうか。

今までに受けた苦痛はそのうちに薄れていくだろう。だが、一線を越えた事実決して消えることはなく、記憶の付箋として残り続ける。

「大丈夫だ。何も怖いことなどないぞ」

頭を優しく撫でられた。

「ところで……君に聞きたいことがある」

ずい、と顔を寄せられて思わず身構える。落ち着いてきた呼吸が別の意味で乱れそうになる。

「ハロツサ、という町を知っているか？」

「——！ ……」

知らないわけがない。七年もの苦痛な歳月をそこで過ごしたのだから。

どんな顔をすればいいのか、そして自分は今どんな顔をしていたのか。悲しそうなアカシアの表情に申し訳ない気持ちが溢れてくる。

「……そうか。やはり、そういうことか」

推測が正しかった、とアカシアは声を落とす。

「君が気を失って、介抱しようとして見つけてしまった。その手首の跡は……見覚えがある」

「……………」

自分の手首を目でなぞった。外してから間もない鉄の枷の跡はまだはつきりと焼き付いたように赤く痣として残っている。

「君が都へ急ぐ状況も理解した。……だからこそ、頼む。君に降りかかる火の粉は私がすべて払う。だから」

「——わかりました」

「……ん？」

「いいですよ。もう、おまかせします」

「カルル……？」

アカシアに背を向け、荷馬車から降りて夜の草原のしじまの向こうを見据える。

ハロツサから逃げ出したあたりから、薄々わかっていた。

都に帰ったところで、思い出を取り返すことなど出来はしない。

ましてや、あの時の少女との再開など夢に妄想もいいところ。

自分が木の枝で叩かれていた間に、少女は様々な経験をして喜怒哀楽を育み、素敵な女性になったのだろう。

あのひと時の幸福感を与えてくれた笑顔すら、実はもうおぼろげにしか思い出せない。

「……………」

オカリナの音色がして、ふり返った。

粗末な荷馬車の上、月明かりに照らされながらオカリナを吹いている者がいる。

それは彼女しかありえないのだが……そうではない、この吹き方を自分は知っているのだ。

——いや、それ以前にこの旋律は……。

一息分ほどの演奏が終わると、彼女はオカリナを唇から離して呟いた。

「……不思議な感覚だ。すっかり忘れていたと思っていたのに、指が憶えている。耳が思い出して、また次の音が頭に浮かんできるとても心地が良い」

巧いか下手かではない。

その短い演奏にカルルは涙が溢れていた。

「ああ、……すまん、話の途中に。懐かしくてつい、手に取ってしまった。——って、おい、どうした？」

鼻声になるのが嫌で、黙って首を横に振る。

「大事な物だったのか……。悪かった」

「違うんです、そうじゃない……」

「では、どうしたと言った？　なぜ泣いている」

「あなたは……その曲をどこで？」

「——曲？　あ、ああ。今のはな？　私が幼いころに、ある少年から教わった曲なんだ」

ぐっ、と胸が詰まる。

そんなまさか。

「変な話をするが……私は戦災孤児でな。両親ともに失って、王都の孤児院で暮らしていたんだ。いつも一人で過ごしているような子供だったよ。同じくらいの年の子ともあまり遊ばないで、いつも形見のオカリナを吹いていたんだ」

戦災孤児。

王都の孤児院。

カルルにも懐かしい言葉だった。

夜中にトイレに起き出して、部屋に戻る途中でさらわれるまでは、カルルもそこで暮らしていた記憶がある。

「それで、私のことをじっと見つめている子供がいたんだ。新しく入ってきた子で、話を聞くとその子も私と似たような境遇だった」

その時はきつと、さぞかしモノ欲しそうな目で彼女のことを見ていたのだろう。オカリナを胸に抱えて警戒された覚えがある。

「聞けばその子も母親がよくオカリナを吹いてくれたらしい。その時にあの子から教わった子守唄、それがいま、私が吹いた曲なんだ」

「……その子とは、それから……？」

「ん、ああ……居なくなっただ。ある日突然、ぱったりと。迷子では……ないだろうな」

「じゃあ、その子の名前は」

「いや……。思えばなぜ聞かなかったのだろうか。あんなに仲良く……していたのに」

手に持った白い陶製のオカリナを見つめ、アカシアは思い返した。そうだ、あの時は貸したまま別れて、それであの子は居なくなっってしまった。あの時は形見を盗まれたと大泣きしたが……。

そういえばあのオカリナによく似ているなと思い、何となくそれを裏返してみた。

すると、見覚えのある一対の剣の紋章に目を奪われた。

とある貴族が戦での功労に剣の誉れとして王から授かった名誉ある家紋だ。

「……………え？」

それを見た瞬間、走馬灯のように記憶の断片が次々と甦った。

転んで危うく割ってしまいかけた時の傷や、それを隠そうと不器用な母が塗ってくれた、少し色の違う白色。

そして確信した。

「これは……」

間違いない。

これはあの時に失くしたオカリナだ。

「それをあの子に返すことだけを考えて、今日までなんとか生きてこれました」

「カルル……」

信じられないという顔でこちらを見つめる騎士は、あの立派な出

で立ちを忘れてしまうほどに幼く見えた。その姿に当時の記憶が重なり、再び涙が滲んできた。

「それはお返しします。何度助けてもらったかわからないけど……もう、無くて大丈夫だから」

「そうか……君はあの時の……あの時の………そうなんだな………」

「？」

言葉はなかった。口を開くよりも早く抱きしめられ、言葉が言葉にならなかった。

肩の後ろから声がする。目の前には暗い草原が広がっているだけ。何も見えないが、とても温かく心が安らぐ声だった。

「良かった……生きていた……生きてた………」

「……死んだと思ってましたか」

そう言つと、アカシアは肩を掴んで向き合う姿勢で言った。

「ばか、あんな小さな子供が急にいなくなったりしたら……、そう思ってしまうだろう……ばか」

「そんなに泣かれると……僕も困ります」

「……感情に我慢はしない主義なんだな」

鼻をすすりながら開き直つても様にはならない、とは言わずに聞いた。

「そうか……うん、良かった。よし、——寝ようか」

「え？」

背を向けてひとりで荷馬車にもどると、アカシアは半分だけふり向いてバツの悪そうな顔で返事をしてきた。

「いやはやなんというか……恥ずかしくてな。人前で泣いたことなんて本当に孤児院以来なのだ。寝て、今は忘れてくれるとありがたい」

思つたことをすぐに口に出す——と言えばまあアレだが、ここまです素直に感情を晒す人も珍しいのではないだろうか。案外、中身は昔のままなのかもしれない。

「なんだか想像してたのと違うなあ……」

しかし、思い出は思い出のまま美しくあればいいではないか。

運命は数奇なものと言う。その一端と納得すればそれまでのこと。親を失ったこと。誘拐されて売り飛ばされたこと。人を……殺めたこと。

ならば思い出の少女が狼を切り伏せる騎士になっていたくらい、なんということはない。

と、納得することにした。

「何の話だ？」

「いえ。なんでも。それより星が……綺麗ですよ」

「ん？——ああ、そうだな。まるで降ってくるようだ。すこし怖いくらいに」

「……………」

「くあ……おやすみ」

「おやすみなさい」

しかし残念なことにカルルにまどろみが訪れたころにはすでに空は白み始めていて、疲れもろくに取れていないと不機嫌に唸るアカシアには寝惚けて顔に蹴りを入れられた。

気まずそうに荷台で剣の手入れをする騎士という新しい荷物を乗せた荷馬車は向きを反転させ、新しい旅にカルルは手綱を打ったのだった。

おとぎ話

草原の外には、「水の草原」が広がっていると内地の者達は言った。

しかし船乗り達に尋ねると、彼らは内地に「緑の海」が広がっていると答えた。

大昔の、とある冒険家が残した有名な台詞である。彼の偉業を讃える演劇では必ず冒頭にこの言葉が挨拶代わりに語られる。

「海は見たことないけど……似てるんだろうなあ」

どこまでも緑色の大地の中、そこに川の流れのように敷かれた草の生えない道を荷馬車で行く。

この道を外れると方向を見失ってしまうため、決して離れてはならない。

何も目印のない草原を無闇に歩こうものなら、それは目隠しをして彷徨うのと同義である。すぐに自分が真っ直ぐ歩けているかどうか疑わしくなり、振り向きでもしようものなら今度は「前」がわからなくなる。

話では海もそんな感じらしい。

大きく違うのは草原には「道」があり、それさえ視界に入れておけば遭難することはないという部分だろう。

「ほんと、誰がこんな道を作ったんですかね？」

ねえ？ と御者台から後ろを振り返るとアカシアの大きな欠伸があった。御者台で馬の手綱を握るカルルからすれば、自称「見張り」の荷台でごろごろするだけのアカシアは暢気のんきなものだった。

「ふむ。退屈も過ぎると人は哲学的命題に挑むと言うが……」

「気分転換に、どうです？」

手綱をアカシアに示して言ってみる。もちろん交代してくれるとは期待していないが。

「いや。私はここで怪しい輩を警戒する任があるからな。操舵は力
ルに専念してほしい」

「警戒、ですか……」

草原の道には分岐こそあるものの、基本は一本道である。

「怪しい輩」が来るとすれば、前か後ろかだけなのだ。時々振り
返るだけしていれば、そう気に留めることでもない。

人の真後ろで堂々と爆睡は気が引けるが、不可抗力でのうたた寝
なら平気らしい。

見張りに意味がないと気がついていないフリをしているにしては、
どうも演技がうますぎる。

ならば本気で警戒しているのか、かなりの天然なのか。

心底どうでもいい推考だが、退屈しのぎにはこのくらいがちょう
ど良い。

「まあ半分は名目なのだがな。この状況で見張りなんて必要ないの
はわかってる。それでも、もう半分は本気さ」

「……と言うと？」

「稀にだが、草原で旅をしていると『出会う』ことがある」

「——ああ、おとぎ話ですね？」

親が子どもを怖がらせるのに使う、草原の悪魔のおとぎ話がある。

「はは。……そうだ、お伽噺さ。誰でも知っている有名な話。その、
原作とでも言うかな」

「原作？ あのお化けが、っていう話じゃないんですか？」

「いや。大体は同じだよ。そうさな、これはいつだったか……私が
初めての遠征に出た時の話だ」

雲がまばらな青空を見上げ、アカシアが語るのをシアンは背中
で聞いていた。

大地のほとんどが草原だとはいえ、地面の土が見えるくらい草の
浅いところもあれば、背丈をゆうに超える、それこそ何かが隠れて
いて急に飛び出してきてもおかしくないような場所もある。

その時は草の丈が腰くらいの、わりと深いところで野営をしていた。

馬車が三台は横に並べるくらい道が太くなっていて、そこに数十名の傭兵が火を囲んで夜を過ごしていた。

夜が更け、全員が雑魚寝をしているのが見渡せる位置にある馬車の上でアカシアも寝そべっていた。

すると、月明かりの下で誰かがむくりと起き上がるのが見えた。

（小便か……？）

ふらふらとおぼつかない足取りで歩くその者は、あと一歩で草原というところで一度立ち止まると雑魚寝の一団を振り返った。

それからやや間があつて、また前を向くと草原に足を踏み入れていった。

（道を見失うくらい離れるほど馬鹿じゃあないだろう……）

そう思つて瞼を閉じた直後、誰かが声を張り上げた。

「おい！ お前どこまで行くんだ？」

その声に起こされ、草原を歩く男の背中に視線が集まりだす。

「離れすぎだ！ 小便くらいその辺で出来るだろう？」

「それとも、何かいいモノでも見つけたか？」

一同に笑い声が響く。草原に現れる美女の悪魔のお伽噺に掛けた冗談だつたのだろう。

だがそれも、振り向いた男の一言に皆が凍り付いた。

「お前ら……あれが、見えないのか……？」

蒼白な面持ちでそう言つた男を、誰も冗談とは思えなかった。

「じゃあ、あれは……」

と、男は前に視線を戻した。

そしてすぐ、

「わ、うわ——来るな！ 離せ、このっ！」

「おいっ！ どうした、戻ってこい！ 戻ってくるんだ！」

何もないはずの場所で必死にもがく男に周りの声は届かないらしく、拳句にその男は道に背を向けて奇声を発しながら走って行って

しまった。

「……とまあ、その男が見たのがお伽噺の悪魔かどうかはわからないが、そういうことが実際にあったということだ」

「……………」

「どうした？」

「いえ……そういう話は苦手なんです」

「そうだな。私も大の男が悲鳴を上げながら走り去っていったのは恐怖したよ」

そっちかよ、とは言っても仕方ない。

その手の恐怖に対しての耐性が自分にはないだけなのだ。能天気と言えば失礼だが、そういうところは羨ましい。

「その時に具体的に何が起こったのかは理解を越えるが、似たような話を方々でも耳にする。それがお伽噺のそれなのかは置いといても、だ。万が一があるということが言いたかったのだよ」

「……………わかりました。それではまた見張りをお願いします」

「まかせてくれ。たとえ悪魔が出ようと君には触れさせんよ」

そう言われると複雑な気分だった。年上とはいえ女性に守られる立場というのは。

だが実際にアカシアのほう^{うわて}が上手なのだからどうしようもない。事が起きれば今の自分は確実に足手まといだ。

彼女がその気になれば荷馬車を奪って一人で逃げることにくらい容易なはず。

（馬鹿だなあ……………）

こういう考えばかり思い付くのは、そういう大人しかない町で長く過ごし過ぎたからだろう。

「……あと、もう少しでハロッサに着きますよ」

「そうか。それじゃあ一旦、この辺で止めてくれ」

「！ はい」

馬に合図を出すと、数泊遅れて荷馬車が動きを止めた。このままハロッサの門をくぐれば、顔の知れているカルルは簡単に捕まって

しまつのは分かりきっている。

なにか、案でもあるのだろうか。

「このまま行けば君は捕まってしまうからな。一応、考えていたのだ」

「どうするんですか？」

まずは、とアカシアは自分の小さな荷袋を探り出した。はち切れそうなきゅうぎゅう詰めそれから引つ張り出したのは一着のローブ。

「君にこれを着てもらう。大きさはまあ、大丈夫だろう」

「え……これは？」

「私もいつまでもこの格好では不便だからな。王都の刻印もそこら中に入っているし。町に着いたらこれに着替えるつもりでいた」

「はあ……」

とりあえず相槌を打ちながら、カルルは茶色い女性用のローブを手につけてしげしげと見つめた。変装、ということらしい。いや、女装になるのだろうか。

「フードを深く被り、ずっと俯いていてくれればいい。別に気にする者がいても、連れは顔に呪いを受けていると私が言ってる」

「……。でも、この荷馬車は？ これだってあの村の物なんです。すぐに気付かれますよ」

「この村に来る途中で奴隷のような格好の子供に襲われ、仕方なく切り伏せて奪った。……という筋書きを考えているのだが、どうかな？」

先程の自分の考えが頭をよぎった。

「完璧です。それでいきましょう」

「よし、じゃあさっそく……」

アカシアの手がカルルの胸元のボタンを外しに掛かった。

「いや、まっ……自分で脱ぎますから！」

「怒ることはないだろうに……。ところで君はこれの着方を知っているのか？」

「着たことはないですけど……。被って腰のひもを縛るだけでしょう？」

アカシアは残念そうにため息を吐き、カルルが着替えるのを待った。

そして最後に腰のひもを結び始めた時だった。

「ああ違う、そうじゃないんだ」

期待して待っていたかのように素早くひもをカルルの手から奪う。「結び方ひとつを取っても流行り廃りがあるんだ。どんなに世間知らずの田舎の娘でも片結びはしないだろう」

「……そうですね」

世間知らず、という部分が引かかったが大人しく結び終えるのを見ていた。

「まあ、蝶々結びが無難かな」

形の整った綺麗な結び目に満足したように言い、カルルも彼女の意外な器用さに驚いた。

それから一步下がるとアカシアはカルルの頭の上から爪先までを無遠慮なまでにじっくりと見つめ、

「ふむ、悪くない。いや……むしろ良い。華奢な体と顔つきが幸いしたな」

妙な視線を肌に受けながら差し出された手鏡を見ると、何ともいえない気分になった。

「とても似合っているぞ」

「……勘弁してください」

「この町娘っぷりならいかに知った顔といえど早々に気づかれることはないだろう。さっさと通り抜けてしまえば大丈夫さ」

「……行きますか」

「ああ。それとカル、これを懷に」

「？」

寝ぼけて掴みかかった時に一瞬だけ見た短剣だった。

「いくらなんでも丸腰ではな。あの長剣よりはこちらのほうが使い

易い」

持ってみると短剣というよりは少し大きめのナイフといった印象だ。懐に携帯するにはこのくらいが良いのかもしれない。

「ありがとうございます。……あの丘の向こうにハロッサが見えるはずです」

頂上に生える木が親指ほどの大きさに見える丘を指差した。あそこの上に立てば、あの忌々しい村を見渡すことができる。

……無事に抜けられるだろうか。

そんな気持ちが顔に出ていたのかもしれない。

「なあと、多対一も私の得意分野さ」

「得意分野？」

「……いや、例えば悪かった」

バツの悪そうな顔をして訂正した。

「狼より強い人間はさすがにあの村にはいないだろう？」

と笑って見せる。それにはカルルも肩を揺らして頷き、御者台へと移るアカシアに手を差し伸べた。

その時は、丘の向こうに見える空が曇っているのはこれから雨でも降るのだろうと思っていたのだった。

おとぎ話（後書き）

感想を頂いたことでモチベーションが凄まじく上がり、自分でも驚きました。

モチベーションを燃料とすれば私の飛行機はもう低空飛行どころか常におなが削れているような状態なのでありがたかったです。

救済の名の下に

「何だこれ……」

丘の上から見渡した平原には、確かに存在していたかつての村は無く、代わりに焼け落ちてまだ薄い煙を立ち昇らせている村の跡が残っているだけだった。

近付く毎にその様子は鮮明になり、出入りの門から民家の倉庫まで、村のほぼすべての建物が無残にも焼き落ちていく。

カルルは呆然としながら村の中央の広場まで荷馬車を進め、そこでようやくこの惨状が誰によって引き起こされたのかを知ることになった。

「兵士……？」

鉛色の甲冑に身を包んだ兵士が十数人、どうやらこれは彼らの仕業と見て間違いないようだ。

「……貴女方は？ 先に名乗って貰えますかな」

馬に乗った真鍮色の甲冑を着けた男が言った。ひとりだけ色が違うのは彼が指揮官で、槍を持った残りが部下ということだろう。歩兵の顔は甲冑で見えず、表情がわかるのはその年配の男だけだ。

二人は荷馬車から降り、質問にはアカシアが答えた。

「名はアカシアという。王都アリシルより、特命を受けている。ここを通ったのはその道中だ。貴官らは何者か」

特命とわざわざ口にしたのは彼らも同じアリシルの兵士だと判断したからだろう、とカルルは思った。アカシアの甲冑は少し仕様が違うようだが、見た目の特徴が彼らのと良く似ているのだ。

それを聞いた指揮官らしき男は年相応の柔和な顔で驚いた反応を示した。

「貴女がアカシア殿？ ——なるほど、確かに話に聞く通りだが……随分とお若い」

「よく言われる」

そつけなくそれだけ返すと、おつと、と思い出したかのように男が続けた。

「いやはや失礼。私はルイーグ、ルイーグ・コルト。我々もまあ……特命といえますかな。……して、そちらのお嬢さんは」

思わずびくつと肩が跳ねた。それを怯えさせたと勘違いしたのか、ルイーグと名乗った男はわざわざ馬を降りてこちらに歩み寄ってきた。

「おつと……。馬上から挨拶など失礼をお許しください。しかし決して、貴女を怖がらせようというのではありません。どうか、顔を上げて下さいませんか」

この年でその立場ならもつと高慢な性格を想像するものだが、ルイーグという男の物腰の低さは逆に相手を委縮させてしまうほどだ。別の意味で指揮官向きの人間性と言える。

しかしカルルは慌てて隣のアカシアを小突いて助けを求めた。

「ああ——ルイーグ殿、すまない。彼女は顔を人に見られるが怖いのだ。呪いを受けていてね」

あと数歩のところでルイーグが立ち止まったのがわかった。

「そうですか……それはお気の毒に」

ルイーグは振り返ると焼け焦げた家々を見渡して語り始めた。

「軍属……このような身ではありますが、人の心はまだ残しているつもりです。私はこれまでに赴いてきた地で、未来に傷を負った子供たちを多く見てきました。不幸な子供をひとりでも多く救済したい……それが私の望みなのです。……この村がこんなことになってしまったのは確かに我々のせいに違いありません。我々が役目を果たそうとすれば、必ずそれを邪魔する輩が居ますから。争いは耐えないのす。それでもここのような、余所でさらわれた子供を奴隷として使うような村はすべて潰さなければいけません。若い世代が我々の世代の苦勞まで背負うことはないのですから。その世の中が実現するまで、どうか貴女にも強く生きていてほしい」

「ルイーグ隊……聞いたことがある。『救済の兵士』、と名高い？」

「お恥ずかしい。そう言つて貰えるだけで――」

「嘘をつくんじゃねえよっ!！」

瓦礫の陰から飛び出した男がそう叫んだ。すぐさま歩兵に取り押さえられ、地面に組み伏せられて凶器らしき農耕具を取り上げられてもなお、顔だけルイーグに向けて吠え続けた。

「なにが『救済の兵士』だっ!　なにかも奴隷の子供まで――」

その叫びはルイーグの靴の爪先が男の鼻を蹴り潰す音で途絶えた。
「黙らせろ」

男の口に猿轡が噛まされる。

「ルイーグ殿。これはどういうことか」

アカシアの声にカルルすらぞつとする冷たさが宿る。

それに答えるルイーグの柔和な笑みも先ほどとは違って見えた。

「なーに、逆恨みでわけのわからぬことを叫ぶのはよくあることです」

その視線が見えない取引でも持ちかけているようだったのがカルルにも感じられた。

「……ひとつ、お聞きしたい」

「?　なんでもどうぞ」

「ここで『救済』された子供は?」

「それは……あそこの荷馬車の中に。我々の荷馬車です」

「人数は」

「……ひとりです。かわいそうに、他は皆、彼らの手によって。奪われるくらいなら殺してしまえと、凄惨な光景でした」

ルイーグに指を差され、兵士に縄で縛られた先程の男が暴れた。が、すぐに押さえられ、猿轡のせいで言葉も聞き取れなかった。

ルイーグがそちらを見ている隙にアカシアがカルルにそつと囁いた。

「カルル。君がここを離れる時に居た子供の人数はわかるか?」

「……十三人です」

「そうか」

アカシアは再びルイーグのほうに目を向けて、

「ならば、その亡骸を確認したい。よろしいか？ ルイーグ殿」

「……………ええ、よろしいでしょう。では私に付いてきてください。——お前達はここで待っている」

「はっ」

槍を携えた兵士たちは威勢のいい返事とともに姿勢を正した。

ルイーグの後に続いて歩く途中、アカシアが耳打ちしてきた。

（私から離れるなよ）

「え？」

思わず聞き返したがアカシアはそれを無視してルイーグの後を追った。不穩に感じながらもカルルは少しアカシアに詰めて歩いた。

「子供たちはここで村の者に……………助けられなかったのが残念でした」

火の手を受けていないある建物の前に来るとルイーグが立ち止まった。

三人が中へ入るとそこにはただ物のように並べられた、変わり果てた姿の奴隷の子供たちの姿があった。

「ひどい……………」

胃からこみ上げてくるのを堪え、カルルは惨状を目に焼き付けた。血の気の引いた幼い顔はすべて知っている。頭が真っ白になって倒れてしまいそうだった。

——それに……………。

ここが穀物の倉庫に使われていたことをカルルは知っていたが、なぜ殺される寸前の子供が倉庫に居たのかという理由は思い浮かばなかった。いくら労働力が大事だからといっても食糧と同じ場所に閉じ込めたりはしない。

そういえば、ここに入れられていた穀物の袋も見当たらない。

「どうやら、奴隷用の倉庫としてここが使われていたのでしょう。」

我々が踏み込んだ時にはすでに……」

ぞくり、とカルルの肌が粟立った。

アカシアを見るが、彼女は倉庫に足を踏みいれてからずっと横たわった亡骸を慎重に調べていてカルルには目もくれない。

そんな彼女が唐突に声を発した。

「ルイーグ殿よ」

「……なんでしょう」

「たった十人足らずの戦力で、良くこの村を制圧出来たものだ。こんな村では特に抵抗も強かつたろうに。おみそれした」

とは言いつつも声色は冷たいどころか棒読みに聞こえる。

感嘆の言葉が意外だったのか、ルイーグはこんなことを口にした。「いえいえ。ろくに戦闘の経験も武器も持たない者など、どれほど束になつても怖くはありませんよ。農耕具や、刃物ですら山鉈程度でした」

「そうか……」

「もうよろしいですか？ 済んだことは仕方が無いとはいえ、ここにいるのはやはり心苦しい」

アカシアに背を向け、ルイーグが倉庫の扉に手を掛けた時だった。

「ふざけるな……それが気高きアリシルの老兵か」

その声の怒張にカルルは竦んでしまった。

「ほう……なにか失礼でもありましたかな」

「ここにいる子供は全員、そなたらの槍で殺されている。山鉈や農具でこの特有の傷痕はあり得ない」

「……………」

ルイーグは何も答えず扉を開け、二人が外に出るのを待った。

それ以外に選択が無く倉庫を出ると、距離を置いて兵士に囲まれていた。

「私とて、かの英雄殿と事を荒げたくはないのです。……わかって

いただけますかな？」

微笑むルイーグは懷から拳ほどの良く膨らんだ皮袋を取り出し、近づいてきた。

「あの子供たちは、この村の者によって不運にも殺されてしまった。そうですね？」

「ああ、はつきりしたよ」

「それはそれは。良かった」

「切り捨てなければならぬアリシルの恥部を見つけることができたのだ。こんなに喜ばしいことはない」

その言葉に場の空気が凍りつく。

ルイーグが「おい」と言うと、微動だにしなかった兵士達が一斉に槍を構えた。

「貴女方に……救済の余地はないようだ」

「そうか。もとより追われる身なのでな。——カル、私のそばを離れるな」

それからカルルには何が起きているのかわからない時間がしばらく続いた。

突き出される槍の先端が見えたかと思えば、すでにその切っ先は切り落とされて地面に刺さっていて、足を払われたと思えば頭上を槍の穂先が真横に薙いでいたり。避けるどころか、本当にアカシアのそばに付いているだけで精一杯だった。

そして気がつけば、立って槍を構えているのもあと三人にまで減っていた。

兵士は均等に距離を取って三方向からこちらを囲み、一撃を繰り出す隙を狙っている。

対するアカシアは、肩で呼吸をしながら常に周囲を牽制している。その顔色には余裕が感じられず、もはや気迫だけで立っているように見えた。

アカシア自身だけならともかく、自分に向けての攻撃も数え切れないほど防いでいたのだ。そんな戦い方をして疲れないわけがない。

傍らでカルルは自らの無力さに歯を喰いしはるこ^どしかできなかった。

せめてもの騎士道

戦神アカシア。

どうせ戦意高揚を図った英雄の与太話、そう思っていた。

実際にはそこそ腕が立つ程度で、すぐにボロが出て力尽きると踏んでいたのは自分だけではないはず。それこそ、端から見ればただの小娘に鎧が付いた程度なのだから。

しかしこれはどういうことか。

手練れが槍で囲んでいたにも関わらず、未だに突くどころか穂先を掠めることすら出来ずにいる。

「——じゃあらっ！」

一人が死角から仕掛けたはずの一撃も、体が躲かわしてから首がそちらを振りむくのだ。もはや後ろに目が付いているとしか考えられない。こんな奴は軍格闘術の師範にだっているようなものではない。

（騎士道精神に乗っ取りたいとこだけだな……。まず勝たなきゃいけないもんなあ。ルイーグ隊長なんて見てるだけだしよ……）

時には不合理なほど徹底した騎士道を貫き、大陸に名を轟かせる騎士に憧れていた。しかしとうとう自分はなり損ねたらしい。

「マルザ、エルム。噴流嵐攻撃だ」

「了解。じゃ、あつしが二の手でいいですか？ バラル副隊長」「了解。このエルムが三の手を務めさせて頂きます」

噴流嵐攻撃とは名前こそ派手だが、要するに打ち合わせがされた連携技である。その時の位置関係で担う役割が決まるのが特徴であり、生き残っているのが小隊の中でも錬度の高いこの二人で助かった。

それにアカシアは小娘まで守っていてくれたおかげでかなり消耗している。これなら肩の上下で呼吸を読むことも容易い。

女騎士が長い息を吐き、また吸い始める——その刹那を狙う。

バラルはアカシアを、マルザはローブの娘を狙って穂先を突き出

した。

正面から仕掛けた一の手、バルルの槍はやはり見切られ、剣で軌道を逸らされた。そこにマルザが二の手を加えて守りを崩す算段だが、今回はローブの娘でアカシアの手を煩わせる。

「カルルっ、どけ！」

予想通りアカシアは小娘を庇った。槍を剣で躲しながら素晴らしき身のこなしで回し蹴りの要領で小娘を蹴り飛ばし、マルザの一閃から守ったのだ。やり方は強引だが感嘆の息が漏れそうになる。

しかしこれは決闘ではない。ただの殺し合いだ。

連撃を防いで態勢を崩したアカシアに必殺の一撃を叩き込むエルムが三手目に控えている。

（さあエルム——お前の錬度なら容易いだろう？）

しかし、その瞬間は訪れなかった。

「っ……」

バルルが目をむけた時、エルムは明らかに混乱していた。

槍を突き出す瞬間のために全神経をアカシアへ集中させていたのだ。そんな彼の目の前に蹴飛ばされた小娘が転がってきて彼の集中をかき乱し、判断を数瞬遅らせた。

ここまで狙ってやったのだとすれば末恐ろしい娘だ。

「——っ、せああ！」

気持ちは分かる。が、もう——間に合わないだろう。

体勢を立て直したアカシアはその一閃の突きを紙一重で躲し、代わりに長剣を振り抜いた。

頭と胸の甲冑の隙間、首を確かに刃が通過したのを見た。

（エルム……っ！）

ここで雄叫びの一つでも上げながらこの槍をアカシアに突き出せるのなら、バルルは死神に魂をくれてやってもいいと思った。

（畜生っ……）

それすら叶わないのはこの一度突きだした穂先を引き戻さなくてはならず、その隙が命取りになるからだ。それはマルザも同じで、

もう間に合わないことくらい本人もわかっているはずだ。

——ほら、英雄様がもう剣を振り上げてる。エルムの次はマルザだ。なら俺はあと一発くらいはかませるか。……エルム、マルザ。散っていった部下よ——。

地獄に落ちても皆でまた馬鹿をやるう。

二人目の兵士も膝を折った。残るは自分のみ。目に映る騎士の背景には動かなくなった部下たちが横たわっている。

皆、いい奴らだった。

そしてすまない。最後の最期、自分はお前たちの仇よりも別のものを優先しようとしている。

やはりこれだけは許せなかった。

死を前にし、英雄を目指していたころの自分に後ろめたい気持ちを残したままになるのが怖くなった。

相手が誰であれ——腑に落ちないことには全力で抗わなければ人間は腐ってしまう。

賄賂を断った若き騎士が、それを思い出させてくれた。

「おおおおっ！」

「くっ！」

避けられない攻撃なら刺し違えるまで、と決死の表情を浮かべ剣を構える騎士に胸中で礼を言い、体を反転させる。

残りの人生すべての気力を籠めた、アリシル旗下第一特務ルイーグ隊副隊長、バルルの一投。

最期の槍に相応しい相手をめがけ、槍は投げられた。

「——」

その槍の穂先が先ほどアカシアによって切り落とされていたなかったなら。重心の位置が狂っていなかったなら……確実にそれは心の臓を穿っていたに違いない。

投げられた槍は、折れなかったことが奇跡に思えるほど深く深く標的の背後の壁に突き刺さっていた。

「てめえが死ねば……よかつたんだよ……っ、クソ外道が……！」

あの世にてめえの居場所が

あると思うな……よ………」

投げた直後にアカシアの長剣を受けたバルは倒れ、その顔は最期までルイーグを睨みつけたままだった。

腰を抜かして無様にしりもちを着くルイーグの背後では、激しく壁に突き刺さった槍がまだ残響に震えていたのだった。

ソードブレイカー

「さあ、貴様で……最後だな」

剣をルイーグに向けてアカシアは声を振り絞った。

彼女の体力が限界に近いのはカルルの目にも明らかであり、それはルイーグとて同じだった。

「ふ、ふん。今の貴様に何ができる？ 確かに……部下をやったのは見事だ。だがこれで最期なのは、お前のほうだろうか？」

「……………」

剣をしきりに握り直しているのはもう手の感覚すら危いあやうのかもしれない。

「アカシアさん……」

情けない。自分には励ますことしかできないのか？

この人は女性だぞ？

大して年の変わらない男の自分が守られてどうする？

俺は……。

その時、がくりとアカシアが膝を着き、剣を落とした。

地面に手を着き、苦しそうな呼吸と歪む横顔。

「アカシアさん！？ だ、……………」

大丈夫ですか、などと言えるわけがなかった。どう見ても大丈夫ではない。それに彼女がここまで苦しむことになったのは自分に責任があるのだ。

しっかりして下さい、頑張ってください。

そんなこと、情けなくて口が裂けても言えるものか。

「どけ、小娘。貴様に用はない。だが邪魔をするというのなら貴様も殺す。——どけ」

ルイーグがすぐそこまで迫っていた。剣先を向けて冷徹な笑みを浮かべる男に返す言葉はない。

だが、隣でひたすら跪いている女性にはこんなことを口走っていた。

「アカシアさん。……あなたの言っていたことが分かった気がします」

恐怖心はとつくに振りきれていた。自分がやらなければならない時が来たのだ。

——逃げるのがこんなに恐いだなんて。

「……？ カルル、下がっている」

アカシアはなんとか立ち上がるうと踏ん張るが、やはり立てない。体が言うことを聞いてくれないのだ。

さつき最後の兵士を倒した瞬間に安堵してしまったことで疲労感が一気に押し寄せてきた。これは自らの未熟さに他ならないが、そのせいでカルルまで死なせてしまうのは堪えられないことだ。

「……やる気か？ 小娘」

しかしカルルはそんなアカシアの思いとは裏腹にルীগに立ち向かおうとしている。

アカシアや自分のためだけではない。彼らの手に掛けられた奴隷の子供の命はカルルにとって無視できる重さではなく、せめてもの手向けだ。この男だけは生かしておけない。

「そうだ。お前を……殺してやる。罪を数える」

ルীগの眉間に皺が集まる。無言で振り上げられた長剣をカルルは雲でも眺めるようにじっと見上げていた。

「——死ねいっ！」

振り上げた位置から真っ直ぐにカルル目掛けて剣が振り下ろされる。

「カルルっ！」

アカシアが叫んだのが聞こえた。

直後、カルルの真横で空振りしたルীগがつんのめっていた。

「……………っ！？」

カルルの口元が吊り上がる。

——よかった。

困惑するルীগの表情にカルルは確信を得た。

——自分も戦うことができる。

「この……小娘があっ!!」

今度は斜めに薙いでくる。

ルイーグが剣の切っ先が届く前にカルルは後ろへ飛んでいた。

——見える。

槍の時は慣れない前後の動きに対応できず、結局アカシアの足を引っ張ってしまった。

だが、その時からもしかしたらという気はしていた。

ある日は寒空の木の落ち枝で。またある時は家畜を従えるための皮の鞭で。

一度でも避けようものなら、百回悲鳴を上げるまで叩き続けられる。

痛いのが嫌だから、知らず知らずのうちにあまり痛くない箇所をわざと打たせるようになっていた。

その頃にはもう、相手の目線や体の動きから事前に見切ることを体得していた。

「カルル……」

そのカルルの反応と動きにはアカシアですら戸惑っていた。

「どういうことだ……!!」

同じように何度も何度も。

相手がどう斬ってくるのかわかる。

わかれば、避けられる。

感情にまかせて大振りな攻撃を繰り返した結果、ルイーグにも焦りと疲れの色が見え始めていた。

「小娘、貴様……何者だ!？」

唾を飛ばすルイーグを睨み続けたまま、カルルは懐からある物を取り出した。

「俺は……臆病者だよ。それでも、いつかは勇者になって大事な人を守るんだ。——あと、俺は男だクソジジイ」

「なっ……」

アカシアから受け取った短剣を抜き払うと言い捨てた。

「今からアンタをぶつ殺すって言ったんだよ。村の人間はともかく……あの子供達を殺したお前は絶対に許さない！」

「ぬうう……！ 生意気な……っ、やれるものならやってみろ！」
飛び掛ってくる男に、以前カルルを痛めつけ弄んだ者たちの記憶が重なる。

——一度でいいから、思いきり刃向ってみたかった。

「死いねえええっ！」

「うるさいんだよ……！」

振り下ろしてくるルイーグに対し、カルルは下から切り上げる。
斜めに落ちてくる長剣の軌道を見切り、こちらの短剣の軌道をそれに合流させる。

それは正面から受け止めるのではなく、あくまで掠らせる程度の接触を狙う。そうすれば小さな軽い短剣でも、長剣の軌道を体から逸らすくらいのは容易いとだろうと咄嗟の反応だった。

「馬鹿なっ……」

言葉はそれが最後だった。

その時にはすでに大振りを外されてよろけたルイーグの脇腹に、カルルの短剣が深く突き刺さっていた。

声にならない断末魔のあと、男は倒れ、そして動かなくなった。

男の服で短剣を拭くと、その櫛状の刃を見つめた。

もう汚れは付いていない。借りものなのだから綺麗にして返さなくては、と無意識の行動だった。

だが、人の命を奪ったようなモノを返されて持ち主は何と思うだろう。それに気づいて、馬鹿らしくなった。

「——すみません」

ようやく立ち上がったアカシアにそれだけ言い、黙った。否、彼女の言葉を待った。

人を殺した。その受け入れ方について彼女の答えに従おうと思っ

った。
「……カール」

拒絶か。

軽蔑か。

恐怖か。

それとも、何だろうか。

「よかった……」

抱き留められた。

いくら考えてもそうなる理由はわからなかった。

それでも、もう少しこの温もりに身を任せていたいと感じた。

「けがはないか？ 大丈夫か？」

「……けがはありません、大丈夫です」

「そうか……よかった。……では、早くここを出発しよう。王都の

追手もだが、この場を誰かに見られるのは避けたい」

するりと背中に戻っていたアカシアの手が離れた。

それでも、彼女が歩き出した後もしばらくその感触と残り香は力
ルルの胸の内を温かく満たしていてくれた。

ソードブレイカー（後書き）

物語の中に出てくるキャラクターたちのイメージをよりはっきりと決めようと思って最近そういう絵を描き始めました。

……でもこれがまた難しいものですね。時間をかけてなんとか描き上げて「……誰だおまえ」てな感じで。

それでも自分で作ったお話に自分で挿絵を付けられるようになったら素敵だと思うんですね。友人には「人はそれを漫画家と呼ぶのだ」と突っ込まれましたが。

とまあ、そんなことをやってるから本編の更新がスローになってしまっているんですが。最低でも一週間に一度の更新を守っていきたいと思う次第であります。

さらば因縁、吹けよ風

「お前……ビゲスのとこのカルルか？」

轡くちわを外された男の第一声。

カルルの記憶が間違っていないければ、この人物は以前カルルを使役していた禿げ頭の友人である。

「あなたと話すのは初めてですね……」

敬語を使うことにためらいはなかった。むしろ、この人は自分のような者達に良くしてくれていたほうだ。

「やっぱりか……。顔を見た時、まさかと思ったんだ。……、ビゲスは……お前が？」

静かに頷いた。

「そうか……」

そう呟いたあと、男は激しく地面に拳を打ちつけた。

「こういうことになるから……！——俺は奴隷ってのが嫌だったんだ！」

急に立ち上がってカルルを睨みつけると、歯が砕けそうなほど喰いしばった。

「言わせてくれ。俺は……お前が憎い。殺したいほどだ。親友を殺されたんだ」

「……………」

言葉が出ない。何か自分にも言いたいことがあるはずなのに。この人の目を見ているとそれがわからなくなってしまふ。

「……だけだよ」

肩の力が抜け、目を伏せて座り込んだ。

「俺は……お前の事情も知ってる。無理やり連れてこられて、あんな目に遭わされてよ。俺だってお前の立場ならきつと……そうしていたさ。なら……仕方ねえじゃんかよ」

その言葉にカルルは男の心情を察した。

「俺はお前が憎い。が……それとは別に、せめてこれからは幸せになつてほしいとも思つてゐるんだ。矛盾してるだろ。自分でもよくわからねえんだ。……笑つちまうよな」

下を向いて笑いながら、地面に水滴の跡が浮かんでいく。

自分が他の子供たちの仇を討ちたいと憤つたのと変わらない。この手で首を絞めて命を奪つたのは、自分にとって最悪の人間であり、そしてまた彼の親友だったのだ。

この人の苦悩を解決することはおそらく誰にもできない。

「カルル……。俺がこれ以上、おかしい考えを起こす前に……消えてくれ」

「はい……お元気で」

自分にできる最善の行動は、余計なことと言わずに立ち去ること。そう悟るしかなかった。

「達者でな。カルル」

軽く会釈をし、その場から離れた。

カルルとアカシアが自分たちの荷馬車まで戻り、手綱を打とうとした瞬間だった。

彼が息を切らして追いかけてきた。

「カルルー！ 村の西広場、あいつらの馬車に、子供がひとり乗せられてる！ こんな村からは一緒に連れ出してやってくれ！」

きょとんとしてからカルルは手を振って返した。

「……はい！ あなたもお気をつけて！」

彼はこれからどうするのだろうか。村は壊滅し、最後の生き残りとしてどう生きていくのだろうか。

親友の仇を見送る彼の胸中など、カルルにすべて察することなどできるはずもなかった。

ただ、もう後ろをふり返らないことだけを決め、彼の最後の頼みを叶えるため村の西側にあるもうひとつの広場を目指した。

「なっ……」

それを見てアカシアが驚愕したのも無理はない。開いた口が塞がらないとはこういうことだ。

それを初めて見た時はカルルさえそうだったのだから。

「……倉庫の中には居なかったから、きつとその最後の一人つていうのはコイツのことだろうとは思ってたんです」

「まさか……いや話には聞いていたが、——信じられん。本物か？」
馬三頭で引く大きな屋根付きの馬車の中には、後ろ手に縛られて目隠しをされた子供が乗せられていた。

それはまるで収穫を迎えた小麦の穂のよう。黄金色^{こがね}の髪の隙間からちよこんと生えているのは獣の耳。成金趣味の贅沢な腰帯にしか見えない尻尾からも、同じ色の毛を生やしている。

「獣人……」

それだけ呟いたアカシアの隣をすり抜けて荷台へあがると、その少女に近づいた。

「ええ。獣人は希少ですからね。奴隷を商品として扱う奴らがついでに取引を持ちかけていくんですよ。物好きで欲しがる金持ちは多いらしくて」

感情の籠らない声でそう説明し、カルルは少女の目隠しを取った。

「——カルにいちゃん！」

手を縛っていた縄を解くと弾けるように抱き着かれた、というよりはしがみ着かれた。

おいおいと泣きすぎる少女にアカシアが、

「……にいちちゃん？ 兄妹なのか？」

と二人の顔を見比べて言ったのでカルルは笑った。

「違いますよ。僕たちみたいな子供のなかじゃ自分が一番年上だったんで……教育係みたいなことをさせられてたんです」

そう言いながら涙と鼻水を塗りつけてくる頭を乱暴に離れた。

「ぐすっ……にいちちゃん。みんなが、みんなが……」

「言わなくていい。……もう大丈夫だから。お前は？ けがとかし

てないか？」

ふるふると首を振った少女を立ち上がらせると荷台から降りるのを手伝い、周囲を見渡した。

「このまま出発して、大丈夫ですかね……」

焼け落ちて骨組みだけになった家、瓦礫のように転がる人間。アカシアの目からすればさながら戦火の略奪にあったのと変わらない惨状だった。

「仕方ないさ。ルীগ隊、そして人買いとはいえ村を潰した。罪状がひとつたつ増えたところで追われる身なのは変わらない」

「いえ……そういうことじゃないんです」

「ん？」

「この村の人間はともかく……倉庫の子供たちはなんにも悪くないのに殺されて。せめて……」

カルルの言わんとすることを察したアカシアが先に言った。

「それはそうだ。……だが、残念だが墓を建てて弔ってやるだけの時間の余裕はないのだ。わかってくれ」

「……はい……。……行くよ、メーネ」

自分たちの荷馬車に乗り込むとカルルは手綱を握った。

村から草原に出る道を進みながら、痛々しい破壊の限りを尽くされた景色にかつての風景を重ねていた。

（あんなにいっぱい、人がいたのに……）

通りの端に倒れている者や井戸に上半身をつっ込んでいる者、折り重なるようにして倒れている者。その中に身動きするものは居ない。

「……先代の王が戦死してから、アリスルは腐敗の一途だ。ルীগもアリスル王が健在のころはここまで表立ったことはしなかったはずだ。これから同じような奴がまた出てくるだろう。……あの王子では、どうにもできないだろうな」

「そんな状況で……僕たちは大丈夫でしょうか」

思いのほかカルルが不安がったのを見て、アカシアは補足した。

「なに、他国の領土に入ってしまったえばそう簡単には追ってこれない。もしそれでも追手が掛かることがあるとすれば、よほど国同士が友好的か利害が一致している場合だろう。……まあ、隣国とはいえローデリアとアリシルは昔から疎遠な仲だ。ローデリアがわざわざ面倒事を引き受けることはないだろう」

「……そうですか」

地獄と化した村の出口がようやく見えてきた。

ハロツサの門を過ぎると目の前はまた草原になる。ここから見渡せる場所に町や村の小さな影はいくつか見えるが、王都から逃げることを考えると次の目的地は決まってくる。

「次はあそこだな。ここからだちょうど日が沈む方角だ」

そう言っただけでアカシアが指差した先には一際大きな町の影があった。カルルも話くらいは耳にしたことがあるのでそこが何かは知っている。

「あそこを超えたら、ローデリアなんですよ」

「そう、国境の街ケルン。あの町の中にある国境を越えればこちらの勝ちだ」

ハロツサもそうだが、町や村から草原に出る道は木の枝のように分岐していることが多い。次の町の名前と矢印の記された立て札を頼りにそこから目的地に向かって伸びるものを辿るのだ。

「この距離だと二日、ってところかな……」

ぼつりとカルルが呟くと、メーネが背後の荷台から御者台に移ってきた。

「ねえ、にいちちゃん？ どうしてそんな力ツコウしてるの？」

「ん？ ——あ」

どつりでやけに下半身の風通しが良いわけである。

「いいじゃないか、良く似合っているのだし」

思い出したように居心地が悪くなつて着替え始めたカルルにアカシアが残念そうな声を上げた。

「そついうわけにはいきません。それに、この服は町に着いたらア

カシアさんが着るんでしょう？ その格好じゃダメですよ。なんでアリシルの軍人がこんなところに居るんだ——って。国境を越えるなら『普通の人』にならないと」

「仕方ないのか……くそう」

「くそう、じゃないですよ。それと、メーネ」

「なに？ にいちゃん」

「その、にいちゃんっていうはやめてくれないか」

「どうして？」

丸い瞳にカルルが大きく映り込んで曇りひとつない眼差しが返ってくる。

「どうしてって……そもそまだな、どうして俺のことを兄ちゃんなんて呼ぶんだ？ そりゃあ面倒を見たのは俺だが、メーネより年が上の奴は他にも居ただろう？」

「だって……」

「だってじゃない。とにかく『にいちゃん』はやめろ。いいか？」

「……じゃあ、にいちゃんのことなんて呼んだらいいの？」

「……カルルでいい」

「カル、ル……」

「そう。次からはそう呼ぶことな」

「——カルル」

アカシアの声だった。

「はい？」

「あまりいじめてやるな。大してこたわることもないだろう？」

呼び方くらい好きにさせれば」

メーネの頭を優しく撫でながらアカシアはそう言った。まるで妹をいじめた兄が母親に叱られている構図だ。

「……………」

どうも腑に落ちず唇を尖らせるが、アカシアにそう言われると押し通す気も萎えてしまった。

「……………わかったよ」

と観念した。

「ありがとう、にいちゃん！」

ぱあっと輝く笑顔でそう言われると気恥ずかしくなって目を逸らしてしまう。この感覚が好きになれなくてやめてほしかったのだ。

「……お兄、ちゃん」

「んなっ——」

「冗談だ」

「……勘弁してください」

その日は背後のハロッサが手のひらに収まるくらいの距離まで来たところで日が落ち始め、荷馬車は止まった。

夕焼けでまだ空は明るい、そろそろ野宿の準備を始めなければあつという間に暗くなつて面倒なことになつてしまう。

「明るいうちに出来ることはしておこう。まず一番に火、あと荷台には覆いの布を掛けておくんだ。食糧のにおいが災いを呼ぶことはざらだからな。夜露や雨よけにもなる」

アカシアがてきぱきと指示を出す中、カルルは荷台で眠りこけているメーネを起こそうとして止められた。

「そつとしておいてやれ。ずっと怖い目に遭つてたんだろっ」

「……そうですね」

目隠しと縄で縛られていた状況を思い出せば、さすがにこの安心しきつた寝顔を覚まさせようという気は起きなかった。

そつと一番分厚い毛布を掛けてやり、アカシアと二人で火を囲む。……今夜は雲が多いな。月が隠れると昨日の今日でも明るさがだいぶ違う」

追われている身とは思えないくらい暢気にそう言うアカシアがカルルは羨ましかった。

「そうですね……」

自分とは言えば、ルイーグを刺した時の光景が稲光のように頭に浮かんで頭から消えてくれない。とてもアカシアのように雲の量を気にする余裕はなかった。

ずっとこのままなのだろうか。

言い表せない不安がカルルを静かに蝕んでいた。

「昼間のことを気にしているのか？」

はっとして焚火の炎から視線をアカシアにむけた。

それが顔色に出ていたのだと初めて気が付いた。

「……はい」

カルルが頷くとアカシアは少し考えた後、口を開いた。

「そうだな……お前にすこし、説教をしてやろうと思う」

「説教？」

予想外な単語に思わず聞き返すと、アカシアは「酒はあるか」と聞いた。

「……暖を取るための酒なら、少しは」

「それでいい、くれ。——ああ、カル。お前も飲め」

「いえ、僕は……」

「飲めよ」

有無を言わさぬ態度に仕方なく、木のコップを二つ出した。

そして驚いたことに、一口を含んだ直後にはもうアカシアの頬が紅潮していた。

「あの、お酒……弱いんですか？」

「ん。ああ、そうかもな……。いや、そんなことはいい。せつきょうだ、説教」

「は、はい」

改まって佇まいを直したカルルにアカシアは目を細めてコップを振った。

「いいか。私が酒を飲むのは素面すめんで話すようなことじゃないからだ。聞くのも同じだ。飲め」

「……………」

そういえば酒など一度も飲んだことが無かったのを、カルルは喉を焼かれてから思い出したのだった。

「……………っ！ー！」

「くす。それでいい」

アカシアは肩を揺らして笑っていた。

「いまからするのは価値観、モノの考え方の話だ。こんなこと、酒と一緒に話半分に聞くくらいがちょうどいいだろう？」

「……なんの……話ですって？」

水の入った皮袋から口を離すとようやく言葉を発した。

「カル、お前……ルイーグのことを後悔しているな？」

「――」

いきなり核心を突かれ、言葉に詰まる。

「だがそれでいいんだ。お前は間違っていないよ」

「え……？」

くい、とコップを傾けてから漏れた短い吐息には、カルルが思うよりも遥かに大人びた雰囲気満ちていた。

「……その罪悪の阿責に問われることすら忘れてしまう者もいるのだから。私みたいに、な」

その乾いた笑い声はカルルには真似のできないものだった。

「アカシアさんは」

「ん」

「……なんとも思わないんですか？」

アカシアの昼間の戦いぶりを見ると、彼女は人を斬ることに關して何の感情も抱いていないようだった。ただ相手が襲ってくるから払う、というふうに。

「まるで雑草でも払うみたいに。……僕にはそう見えました」

「雑草か、巧いな。……そうだ。鬱陶しい雑草は、鉈で払えばいい」

「……」

「初めてが――一番辛かった」

「え？」

空になったコップを脇に置くと、アカシアは胡坐から片膝を立てて座り直した。その瞳には焚き火の炎が揺らめいている。じっと炎を見つめたまま、思い出すようにその口が動く。

「戦場いくさばに出て、相手が私を殺そうとしているのを肌で感じたから、怖かった。死ぬのは想像ができないから、本当に怖かったよ」

運命の悪戯と偶然が重なった、初めて戦場で相手を殺した記憶が蘇る。

胸に深々と刺さった剣を、震える手が握っている。それが自分の手だと信じたくなかった。

「二回目は——その半分だった」

その時は復讐に駆られて。大好きだった友の仇を討てるなら、自分はどうなろうと知らない。だから初めから殺すつもりで相手に切り掛かった。その時の自分はまるで獣か人外の何かだった。

「最初と二回目でも、やったあとの受け止め方が全然違った。二回目の時は、『——ああ、またやってしまった』と。立ち直るのがだいぶ早かった」

今まで幾度と喉に引っかかっていた言葉が、ついにカルルの口から出た。

「……僕も、二人目です」

「ああ、らしいな」

「——え？」

驚いてアカシアの顔を見た。深い闇の中までも見通せそうな妖しい翡翠の瞳がこちらを覗いている。

「昼間、そんな話をしていたろう？」

「あ……」

そういえば、ハロツサの最後の一人がアカシアの前でそのことを口にしていた。

「ビゲス……」と言ったか。お前の雇い主か？」

「……ええ。そうです」

「それも後悔しているのか？」

「……」

わからなかった。

ビゲスが酔って馬小屋にやってきたあの時、もし何もしていなか

つたら、村を逃げ出していなかったなら。

間違いなく、自分はルイーグ隊によって殺されていた。

それに、ビゲス本人に対しての憎悪もかなりあった。客観的に考えてもあれ以外の選択は無かったはずだ。

「たえ間違ったことでも……。たえやり直すことが出来たとしても……。僕は同じことをすると思います」

そうするしかなかった。

それでも、やはり間違っているんじゃないか、罪を償わなくてはいけないんじゃないか、そんな決着の付かない葛藤を続けていた。だからアカシアにお前は間違っていないと言われて救われた気がしたのだ。

「死ぬほど思い詰めるも、雑草を刈るも、それはお前次第だ。カルル」

「……はい」

「もしお前が間違っていて。その結果として周囲が敵だらけになったとしても。私だけはなにがあっても味方でいてやる。それを忘れるな」

酔っているからだろうが、これほど齒の浮く台詞をよくも面と向かって並べてくれる。

それでも。

「ありがとう……。ございます」

こんなにも体が暖かい。嫌なものが氷のように溶けてどこかへ流れて出ていってしまったかのようだ。

「……カルルは泣き上戸だったのだな」

ぼろぼろと膝にこぼれる涙が止まらない。もちろん、酒のせいなどではない。

「……もう眠るといい。明日も早いからな。ゆっくり眠れば、気持ちも落ち着く」

優しい声にカルルは涙を拭くと、「おやすみなさい」と残して荷台に上った。

すやすやと寢息を立てるメーネの邪魔にならないよう体を端に寄せ、毛布から顔だけ出して曇った夜空を見上げた。涙で詰まった鼻を冷たい夜風が抜けていった。

しばらくは焚き火の燃える音とアカシアの気配を聞きながら、メーネの頭を撫でていた。気が落ち着いて眠くなるまでそう時間はかからなかった。

さらば因縁、吹けよ風（後書き）

小説というか物語を描いていると、自分が創造したキャラクターに教えられることがあります。

自分がタイピングしているはずのセリフや思想に、なるほどお………
って感心してしまうことが一作品に二つ三つほどあるのです。それがこの作品でどのくらいあったかは忘れてしまいましたが。なにぶんこれを書き上げたのはもう一年も前になりますから。

あらすじはこのへんまでですけども。物語はむしろこっからが本番
っす

頭上の鳥

とても恐ろしい夢を見た。

内容は思い出せない。汗ばんだ額を拭った。

自分が何か取り返しをつかないことをしてしまい、追いかけてくる恐怖からひたすら逃げ続けるという夢だった。

あと一歩で恐怖に肩を掴まれる——というところで救いの手がどこからともなく差し伸べられ、その誰かの手の温もりにいつしか恐怖は消えていた。

「……………」

カルルが半身を起こすと、自分とメーネとの間に毛布が一枚余分に敷かれていた。

そこにさつきまでアカシアが寝ていたのだと気付くのにそう時間はかからなかったが、その本人はどこへ行ったのだろうか。

「——ん、最後はメーネか。カルも飲むか？」

荷台の外から声がし、見ればアカシアが火を起こして何かをしている。芳ばしい匂いが湯気とともに鼻腔をくすぐり、どうやら珈琲を淹れているようだ。

「昨夜の火種がまだ残っていてな。道具だけはいつも持ち歩くようにしているのだ」

彼女の荷物がやけに多いのはそのせいだったらしい。見慣れない形の真鍮の鍋に三脚、粉末に挽いた珈琲豆が詰まったガラスの瓶。それらを見る限りでもかなりのこだわりを感じられる。

「いただきます……………」

渡されたカップの温もりがじんわりと手に優しい。そういえば随分と久しい嗜好品だ。

一口啜り、その味に思わず目を見開いた。

「……甘い！ 砂糖が入ってるんですか？」

「私は苦いのはてんでダメでな。そのほうが美味いだろう？」

「でも砂糖って……すごく高いでしょう」

本当に飲んでも良かったのかと疑うほどだ。

少なくとも砂糖は一介の騎士が給金で買うには高すぎる代物である。それに高価な砂糖は蜂蜜のように甘味料としてではなく、万病に効く薬としての認識のほうが強い。珈琲に混ぜるなど富裕層にしか許されない飲み方だ。

「なに、出てくる前に屯所から失敬したものだから心配するな。それに甘いものは頭が冴える。歯を磨かなくてはならないのが難点だが」

「そう……ですね」

アカシアの話をもとも聞いていられないほどに砂糖入りの珈琲は美味かった。

「……そろそろ夜が明けるな」

日の出前のまだ薄暗い時間だが、白み始めた東の空に目をやると不思議な光景を見ることが出来る。

限りなく黒に近い深緑色の大地の向こうから、細い陽光の筋が空に打ち上げられ始めた。

太陽が完全に地平線から顔を出すまでの短い時間、草原の陽の光を浴びている部分が金色に輝いて見える現象が起こる。

それを草原に住む者は「大地の目覚め」と呼ぶ。

まるで太陽から風が吹くように金色の光が彼方から草原を染め上げていき、その神々しいまでの美しさに息を呑むのは、見慣れた力ルルとて変わらない。

「……綺麗だったな」

「はい。ほんとに一瞬ですもんね」

二言三言を交わしている間も無くそれは終わった。

名残惜しく草原を見渡しても、そこにはもう朝の青空の下に映える緑色が一面に広がっているだけだ。あの闇の中を広がる金色の時間、見間違いだったのかと思うほどに儚い。

「諸説は色々あるのだから。朝露に陽光が反射するせいだとか、^{しよせつ}

精霊の仕業だとか。——もつとも、真実がわかるのはまだずっと先のだろう。そう、私は思うよ」

そう言っただけの地平の彼方を見据えた騎士は、自分の知らない時間で何を見てきたのだろうか。

——遠い。

そう感じざるを得ない。

「なあ、カルル？」

「はい？」

「長い時間会わなかった。今の私はカルルからどんなふうに見えているのか察することができない。私は……変わったのかな」

それはどうでもいい話をしているふうではなかった。ただ、真剣というにはその目はあまりにも穏やか過ぎた。

自分に向けられた双眸には曖昧な返事も、その場しのぎの綺麗言も彼女を傷つけてしまうだろう。

カルルが幼き日を思い返せば、知らず内に口調も当時のものへと戻った。

「……七年前のあの頃としか比べられないのは仕方ないけど、確かに君は変わった。……それに俺も変わってしまったから。それはもうどうしようもないことじゃないか。だからさ、それは悲しむんじゃないくて、良い意味で受け入れてしまえばいいと思う」

その言葉を噛み締めるように視線を落とし、ややあってからアカシアは口を開いた。

「……そうか。カルルがそう言うのなら、きっとそうなんだろう。……すまない、おかしいことを聞いて」

「いや。相談に乗るくらいしか……僕にできることはありませんから」

そう言つたアカシアは少し不満そうな顔をして、カルルも気がついた。

「あ……」

「今の話し方でよかったのに」

「……すみません」

「ほら」

「……………」

今まで喋る時には敬語しか許されなかった生活のせいで、すっかりそれが癖になってしまっていた。

メーネのような例外もあるが、大抵の相手には意識しなければいい敬語で話してしまう。

礼儀正しいと言えばそれまでだが、それでも度が過ぎているのは確かだ。

「……いつかは治せよ？」

「は……ああ、わか……った」

やれやれ、とため息を吐くとアカシアはコーヒーの道具を片付け始め、それを見てカルルもそろそろメーネを起こそうと荷台によじ登った。

「メーネ」

「……………」

「起きろ」

尻尾だけがぱたりと動いたが、起きる気配はなかった。

「メーネ」

声を強くして呼ぶ。今度はふさふさの獣の耳がぴくつと撥ねた。

「ん、んんん」

眩しそくに目を擦りながら仰向けになり、ようやく言葉を発した。

「……にいちちゃんおはよう」

「おはよう。ほら、顔を拭け」

こちらまで眠くなってきたような顔に、水を含ませたタオルを渡してやる。

「……………」

その意味が分からないのか、渡されたそれをぼーっと眺めていたので、結局取り返してカルルが拭いてやった。

「ったく、昼間の元気を少しでもこっちにまわして欲しいもんだ」

朝が弱いメーネの世話をさせられていた頃もよくこうして顔を洗ってやったものだ。

「カルルよ」

焚火の始末を終えたアカシアが荷台に荷物を乗せてよじ登ってき

た。
「とりあえず早いうちに出ておこう。朝飯は道すがらでも食べられるからな。多少あわただしくてもケルンに着くのは早いほうがいい」
「そうですね。じゃあ、先に出発だけでもしましょうか」

草を食んでいた荷馬が出発の気配を感じたのか食事を止め、カルルは足元の水桶を脇に抱えて「行くよ」とだけ言って顔を撫でてやった。

手綱を軽く振ってやるだけで荷馬車はゆっくりと動き始めた。朝の冷たくも清々しい空気を胸に吸い込み、大きな欠伸と共にまた一日が始まったのだった。

「もうっ、触らないでっ！」

「む……よいではないか。少しだけ、な？」

背後のやり取りに耳を傾けて笑っていたのも最初だけだ。

太陽が真上に来てもまだ諦めないアカシアと、耳と尻尾を触られないよう守り続けるメーネの攻防戦。

人のそれよりかなり上に付いている尖ったふさふさの耳。服の裾からはみ出した腰巻のような尻尾。それらが本当に体の一部として機能しているのを見たアカシアが、触らせてくれと言い出したのが発端はつたんだった。

「や、ちよっ……にいちちゃん、たすけて！」

肩に衝撃を受けて振り向くとメーネの顔があつた。その後ろにはアカシアが。

「だから少しだけだと言っているではないか。減るものでもないのだし。ほらほら」

「この人もいじわるする！　メーネ嫌だつて言ってるのに——や、やあああああつ」

「素晴らしい……！　これが獣人の尻尾か、なんという心地良い肌触りだ。そこいらの毛皮とは比べ物にならない」

「さ、触らないでえ……」

へなへなと腰砕けになるメーネに襟首をひつぱられ、ようやくカールが止めに入ったのだった。

「アカシアさん。お昼なに食べます？」
「む」

食欲が好奇心を押し出したらしい。尻尾を放すと、代わりに水の入った袋を引き寄せて栓を抜いた。

「そうだな、私は腹が膨れればなんでもいいぞ」

「……なんでも、ですか？」

「ああ。滋養が高いに越したことはないが。とりあえず体が動けばなんでも食べる」

恐らくアカシアの言う「なんでも」と自分のそのの範囲が格段に違うことに気付いてはいたが、やはりからかってみたい気持ちに負けた。

「よし、メーネ。昼飯はあれにするか」

「え？　なに？」

「ほら、だいぶ前に飯が三日くらい抜きだった時。掘り返してさ……食ったろ？」

「え……え——？」

御者台で足をぶらぶらさせて座る少女の表情が凍りついた。

「なんだ？　雑草とかか？　あれは当たり前外れがあるがいけないこともない」

「ちがうもん……」

アカシアのその笑いもメーネの一言にぴたりと固まった。

「……ミミズ」

「ミ……」

からからとカルルは笑う。

「あれって栄養はすごくあるみたいで。味と見てくれは最悪ですけど、食いつなぐことはできました」

「食べたことが……あるのか？」

驚愕するアカシアにカルルは苦いものを浮かべた。

「仕方がなかったとはいえ……あまり思い出さたくはないですね」

「……………」

アカシアの絶句に満足し、カルルは食料の麻袋を引き寄せた。

「はは、冗談ですよ。どうせ干し肉とパンくらいしかありませんし、ケルンに着いたら野菜を買いたいですね」

そう言って干し肉を取り出して口に咥えると、その袋をアカシアに差し出した。

「なんだ、冗談か……いやおかしいとは思ってたんだ」

安心して袋を受け取るとその中をまさぐった。

「そうだな、いくらなんでもミミズは食べられないよな」

「え？——ああ、ミミズの話は本当です」

「……………」

騎士は再び言葉を失ったが、それに気にせず話を変えた。

「でもまさか、本当にこんななんびりと空を拝められる日が来るとは思いませんでしたよ」

重圧から解放されて、その分余計に感動に回すことができる。

それがこれほど素晴らしいものだとは思わなかった。

「ああ……そうだな——ん？」

つられて空を見上げたアカシアが目を細めた。

「どうしました？」

「あれは……」

指さした方向に目を向けると、空に一羽の黒い鳥が飛んでいる。

カラスではないようだ。

「……………」

カルルが御者台に立ち上がって目を凝らしたのはその鳥に違和感

を感じたからだ。

何かが変だ。直感、あるいは本能のようなものがそう告げている。

「――怪鳥だ。……背中に兵士が乗っているな。おそらく私の件をケルンの国境警備に伝えようとしているのだろう」

「怪……鳥？」

言われてみれば確かに、人のような影が鳥の背中にちらりと見えた気がする。ともすればその鳥は相当な巨体ということになる。

「あんなのがいるんですか……？」

「私も見たのは二回目だ。馬より早く、尚且つ安全に情報を運ぶことができる。怪鳥自体が希少な生き物だからやりあうことは無いだろうが、……まずいことになったな」

その鳥が飛び去っていったのは荷馬車が目指すのと同じ方角だ。

「……このままいくしかないだろうな。進路を変えるにしても、どうせ国境沿いの町にはすべて連絡が回っているだろう」

重い空気の中、カルルが口を開く。

「で……でも、国境の向こうのローデリアはアリシルとそんなに仲が良いわけじゃないんでしょう？　いくら頼まれたからといって、ローデリアが協力するとは限らないんじゃない……」

言っていて不安を抱いた。国と国との関係がそれほど単純なものなのだろうか、と。

「……………。特に関係がないからこそ、これから優位な立場を築いていくための材料として貸しを作ろうとするのはあることだ。樂觀的になり過ぎていたかもな……」

この時カルルは初めて、自分たちが追われている『国』という存在の大きさを理解した。

頭上の鳥（後書き）

先日、久しぶりにラノベを最後まで読み切れました。

「とある飛空士への夜想曲」という、先月映画が公開した「」への追憶」の後日談にあたる上下巻二冊です。

高校時代に「追憶」を読んで「これ以上のは無いだろう」なんて偏食野郎は思っていたのですが、「夜想曲」でまた同じことになったわけ。

内容はもちろんのこと、尊敬せざるを得ないはその参考資料の多さでした。

主人公のおそらくモデルとなった坂井三郎氏関連の著書に始まり、世界観などにも多くの書籍を参考にして物語のリアリティを追及する様は物書きの手本として、私もかくありたいと思いました。

ある面白そうな話が浮かび、それをすぐに描き始めてしまうのではなく、プロット以外にも詳細な設定を描かなければ面白そうだけで終わってしまうという失敗を何度も繰り返した私には彼の姿勢は理想だったわけです。

国境警備隊

ただそこに人が群れているだけならば、それは獣とさして変わらないだろう。

だがそこに『統治者』という立場が成立し、その集団を『国』として纏めると群れは大きく変貌する。

国となった人の群れは、互いを守ることで自分を守るようになる。群れが大きくなればなるほどそれは強固に、安全に。

そうやって一人の力では打ち勝つことができなかった自然の災害や野獣の脅威から身を守ってきたのである。

ところが、そんな無敵にも思える国という存在にも、ただ一つの天敵があった。

自分たちと同じ人間の集団、国である。

それはいつの世も複数で決して一つには統合しえない。

そして互いに敵対していても我が身に利益があるのなら一時的にも手を貸すというのは、人が獣以上に獣らしいことを裏付ける一面ではないだろうか。

「——ほう、あの英雄が。しかも、このケルンに現れるかもしれないと」

わざとらしく驚いたのは、本当にこういう『事件』が久しぶりだったからだ。

母国ローデリアから派遣され、この町で警備を担うようになってから自分はもうすぐ二年になる。平和すぎる日常からかけ離れたそれは何とも刺激的な話だった。

「ええ。どうかご理解とご協力のほどをお願いします。……では、文書は確かにお渡ししました。私はこれにて」

「おや、もうですか？ アリシル王からの使いの方にお茶の一杯も

出さないで帰したなどあっては、国境警備隊の礼儀を疑われてしまいかねません。美味しい茶があるんですよ」

「……この他にも回らなければならぬので、申し訳ありません。では、ケルンの茶は美味かったと伝えておきます」

終始無表情だった若い兵士が、一瞬だけふつと薄い笑みを見せた。いかにも高貴な見た目の彫金の装飾が施された鎧を着た兵士は、おそらく伝令兵の中でも一等の階級の者なのだろう。怪鳥といい、いくらローデリアの膝元の警備隊とはいえ、馬鹿丁寧過ぎるのは確かだ。見栄を張っているのか、ただ真摯なのか。

アリシルの王はまだかなり若いと聞く。若さ故の誠意かもしれない。それとも、誰か悪い大人に耳打ちでもされているのだろうか。

飛び去ってゆく怪鳥を見送りながら短い顎髭を擦った。

それにしても、ほんの数年前には戦神とまで謳われた者を捕えるとはかなり無茶を言ったものだ。自国の英雄の処分こそ聞かない話ではない。……だが、それに他国の力を借りようなどと。大抵は意地でも身内だけで処理する『不祥事』なものなのだが。

「自慢の英雄が落ちぶれていることをわざわざ他国に教える理由はなんだ？ 恥は隠すものだ……」

今のアリシル王の判断にはどうも疑問を抱く。アカシアがもし本当にこのケルンに現れたものならば、その見極めに利用させてもらうのもいいかもしれない。

隊舎に戻った彼は開口一番、部下にこう言い付けた。

「クラストを呼んでくれ。こういうのはあいつのほうが得意だ」

怪鳥の一件以来、カルル達は特に何事もなくケルンへの道を進むことができていた。

早馬に刺客を乗せて王都から追っ手をかけたとしても、振り返ちに遭うばかりではいずれ見失ってしまう。ならば怪鳥で情報だけでも先回りさせて待ち伏せしてはどうか。

というのが、アカシアが予想したアリシルの作戦だった。

「本当に……不気味なくらい平和ですね」

「そうだな。ここまでくると今度はケルンに入るのが不安になる。さつきまではそこに着けば安泰だと言っていたのが」

アカシアの予想が当たっていたとすれば極端な話、単騎で彼女に勝てる刺客はアリシルにはおらず、それを王も理解しているということになる。

そんな猛者がこのか細い娘だというのはだからカルルは今だに違和感を感じてならない。

野生の狼を切り伏せ、槍を持った兵士に包囲されても生き延びることが一体どれだけの人間にできようか。

しかしそれを目撃したカルルが信じないわけにはいかない。

暇つぶしも兼ねて、何か武勇伝の一つでも聞いてみたくなった。

「アカシアさん、そういうえば『戦神』ってすごい肩書きですけど。

なにをしたらそんなふうに呼ばれるんですか？」

いくらかの間を挟み、その問いにアカシアは軽い笑いを交えて答えた。

「なにをしたら、か。同じことをずっと繰り返しただけさ。戦神なんて響きは良いがあれはしにが——」

「うわっ」

地面から顔を出した岩に車輪が乗り上げ、荷馬車が大きく撥ねた馬をなだめてカルルが呻き声に振り向くと、荷台で昼寝をしていたメーネが頭を打ったのか悶えていた。

「~~~~っ！」

「大丈夫か？」

アカシアがメーネの頭に手を伸ばす。

「さ、さわんないで」

「そんなこと言っている場合ではないだろう？ ほら、いいから半ば強引にメーネの手をのけ、その手が初めて獣の耳の間に触れた。」

「……たんこぶになっているな。なら心配はなさそうだ」

「平気だよ……」

口では嫌そうにしているものの、もうその手を払おうとはしなかった。

「打撲を侮ってはいけない。以前、そこから悪魔が入って自分で腕を切り開いた奴がいた」

「悪魔……？」

「打ったところがものすごく腫れ上がって、激しい痛みだったそう
だ。だからそいつは悪魔を焼き殺すために短剣を火で炙ってな。こ
う、ぐりつと――」

とりあえずカルルは耳に入らないように操舵に専念することにした。

花の帽子（前書き）

ガガガの一次選考の結果ができました！
……どうだったって？ 言いません！
泣きたくありませんからね！

花の帽子

「さて、ここからが勝負どころだな……」

鎧を草原に捨て、あらかじめ用意していたローブに着替えたアカシアが言った。

このまま行けば町の正面門に差しかかる。遠いが門番とはもう目が合っているために引き返すこともできない。

カルルは逃げ出した時のままのボロ服、メーネは獣人ということでそれを隠すために有り合わせで繕ったフード、尻尾は良い案が無かったので無理やり腰巻きということにした。

変な形の雑巾にしか見えない出来のフードが気になるのか、先ほどから落ち着かない様子で位置を直している。

「にいちちゃん、コレ取りたいよお……」

「我慢しな。メーネの耳は目立つから。せめて国境を越えるまでは外すんじゃないぞ」

目の前まで来るとその石造りの大門は見上げるほどに立派なものだった。その袂、門番の兵士は二人。書面とこちらと交互に見やつてから口を開いた。

「……こういう者を見ていないか」

手渡されたのは人相書きだった。それを見たアカシアは「ほう……」とだけ漏らし、カルルはぐつと吹き出しそうなのを堪えた。

手配犯『リルレット・アカシア』の人相書き及び特徴。

- ・逃走時はアリシル国製の甲冑を着用。
- ・髪のがさが腰まであり、色は薄い金。
- ・年齢は二十代前半と見られること。

そしてなにより人相書きだ。中途半端に下手くそなせいか、写実的なのだが不気味で仕方がない。

たったこれだけの情報で一人を探すなど、門番にとっては嫌がらせに他ならないだろう。

「いや……残念ながら」

書面を返しながらそう言うアカシアも、心中ではほくそ笑んでいたに違いない。

「そうか。……しかし……」

門番の男は未練がましく、訝しげにアカシアを見つめた。

「……逃走のために髪を切ったと考えられなくもない」

冷たい物が背筋に流れる。カルルはアカシアの反応に注意を向けた。

まさにそう、男の言うようにアカシアは髪を切ったのだ。

肩を撫でる程度の長さでも、その美しい金髪は人の目を引いてしまう。

「……実は……」

アカシアは伏し目がちに言葉を紡いだ。ここで疑われる可能性を考えていなかったから彼女の演技に三人の命運が掛かっている。

「……田舎から出てきた兄妹達に、服を買ってやりたくて、……」

「――」

しまった、と門番は思ったに違いない。情けなさそうに下を向いたアカシアにあわてて言葉を返した。

「そ、そうか。それは失礼した。いや、浅はかな言動を許してもらいたい」

「……ではここを通ってもよろしいか？」

「ああ、構わないが……ちょっと待ってくれ」

男は懷から何やら袋を取り出し、金の音が聞こえた。

「あまり多くはないが……暖かい服を買ってやってくれ。――ほら、お前もだせ」

後輩なのかもう一人の門番の頭を叩き、そちらからも金を差し出されたアカシアは最初こそ戸惑ったが、幸薄そうな笑みを浮かべてそれを受け取ったのだった。

「達者でな。この先の通りの右手側に服屋がある。あそこがたぶんここで一番良心的な店だ。そこで服を探すといい」

「……この御恩は忘れません」

「美味しい物も食わしてやれよ」

カルルも小さく会釈をして荷馬車は門をくぐった。

いくらかして、アカシアが金を数えながら呟いた。

「巧いものだろう？」

「……ええ」

本人にはとても言えないが、アカシアをちょっと抜けた人なのだと思っていた。

しかしあんな演技はカルルにだってできない。

彼女は騎士の名に恥じない女傑だった。

「通りの右手側、と言っていたな」

カルルの隣の御者台からそれらしい店を探すアカシアは地味な口ブには華が無いとはいえ、すでに町娘としては違和感のない格好が整っている。

「別に買わなくても。このままの格好で大丈夫なんじゃないですか？」

「——私はな。だがお前たちのそれはさすがに目立つ」

言われて見ればそうだった。自分とメーネの来ている服というのはハロツサの劣悪な環境を過ごした物で、着ていれば服だが脱げばボロだ。

「服くらい私が買ってやる。遠慮はするな」

「あ、いえお金なら——」

「ねえ、アカシア？」

珍しくメーネから話しかけ、カルルは口をつぐんだ。

「服、買ってくれるの？」

そわそわする気持ちからか、尻尾がぱたぱたと荷台の埃を払っている。

「ああ。メーネは帽子も買わないとな。店に着いてから選ぶといい」「それで……ついでにただけどね？」

「ん？　なんだ、言ってみるといい」

「櫛が、……ほしいなあって……」

「櫛？」

「うん。尻尾にね、ちゃんと手入れしないと虫が湧いて大変なの」

「そういうことか。よし、買ってやろう」

「ほんとに！？　ありがとお！」

余程嬉しかったのか、あれほど嫌がっていたアカシアに背中から抱き着いた。

「つたく、現金なやつだな」

「いいじゃないか。それより、あれではないか？　服屋というのは」

その建物の前で荷馬車を停めると、店の奥から主人が出てきた。

「やあこんにちは。どういったものをお探しで？」

日向ぼっこが良く似合う老人だった。

「店主、この二人に合うものを……そうだな、二着ずつ見繕ってくれ」

「……は、はいはい。ではこちらへ」

アカシアの地味な格好と淡々とした口調の温度差に店主の表情が固まったが、すぐに商売用の笑顔に戻るとカルルとメーネに奥に案内した。

「……これはこれは、また随分と大切に着ておられるようで」

店主が二人の服を見て大げさに感嘆した。それにはこちらも苦笑いで返すしかない。

棚の中から適当な服を探す店主は背を向けたまま話し始めた。

「あたしも長年こういうことを生業なりわいにしていますが、お客様のような方はずいぶんと久しぶりにお相手します」

「……と言つと？」

お客様のような、とは如何なる意味なのか。

しかし店主はカルルの声が聞こえなかったかのように続けた。

「ただ……そういう時は大抵、代金を支払う方の雰囲気というか、なんでしょうね。見るからに『お金持ち』な方々がほとんどなのです」

この店主は自分達がどういう出身なのかに気付いている。カルルは確信した。

「ですがね」

と、店主は呟いてからふり返った。机に服を二着分置くとカルルの目を見る。

「貴方たちほど生氣に満ちた目をしていた子は居なかった。皆、虚ろで、それこそこっちまで苦しくなってくるような……そういう顔をしているのが当たり前だったのだから……」

「……………」

「……失礼しました。年を取るとオチの無い話をしたくなるのです」

「いえ……。それより、俺達のこと——」

「それはご心配なく。ただのしがない服屋ジジイは、お客様がどんな方だろうと態度を改めたりはしません。それにもう年ですからねえ……。お昼を食べているうちに顔も思い出せなくなりますよ」

老獪に笑うと店主は二人に服を勧めてきた。

それぞれ男性用と子供用の平凡なものだったが、生地と作りは良いらしく店主は「目立たないほうが良いのでは？」と悪戯っぽい笑みを浮かべて見せたのだった。

カルル達が店の奥から戻った時、待っていたアカシアがあわてて何か背中に隠した。

「あ……ああ、服は決まったのか？」

明らかに拳動が不自然である。見られたくないものでもあるのだろうか。

その答えは彼女の後ろにある姿見にすべて映っていた。

花飾りの帽子だ。

妙齡よりはあどけない少女が好みそうなデザインの帽子だが、これをからかわない手はない。

「そういえばメーネの帽子、どんなのが良いですかね」

「そうだな……とりあえずアレが見えなければいいからな。まあ本人が気に入ったのを選べばいいだろう」

アカシアがそもそもと落ち着かないのは帽子を手探りで棚に戻そうとしているからだ。じれったいのが表情に現れるから面白い。

「アカシアさんは、帽子とか被らないんですか？」

「私か？……まあ、まるつきり被らないわけでもないが……」

「今のその格好だったら、ちょうど女の子らしい可愛いのも似合うんじゃないでしょうかね」

すると鏡に映る彼女の手がピクリと反応した。

「そ、そうか？ そう……かな……？」

……不意打ちだった。

大国を敵に回すような英雄が、まさかそんな表情を見せるとは思わなかったのだ。

まあ、でもやっぱりアカシアさんには無駄のない実用的なのが似合いますよ——と言って冗談にするつもりだった。

それがどうだろうか。照れて下を向き、そこから上目遣いで「そうかな……？」と言われては。

「あれ？ アカシア、その帽子なに？」

「へ？——あっ」

鏡に映っている帽子にメーネが気付き、ようやく本人も姿見の存在を知ったらしい。

「綺麗な花だね。もしかして、その帽子買ってくれるの？」

「え、う……」

アカシアと目があった。

すでにからかう気も失せ、助け船を出してやった。

「メーネ。アカシアさんだって帽子を買うのかもしれないだろ？すぐにそう決めるのは良くないぞ」

「……うん。……そうなの？ アカシア」

「私は……」

ここまで整えた状況を、まさか無下にはしないだろう。
という考えは浅はかだったようで。

「…… 必要ないな。帽子より鉄の鍋でも被っているほうが私には似合うだろうさ」

拗ねた表情でそう言い捨てると、「この帽子でいいか？」とメーネに聞いた。

「え？ …… いいの？」

「ああ。大事にするんだぞ」

「ありがとお！ アカシア大好きっ！」

嬉しそうに鏡の前に立つメーネを眺めながら、カルルがぽつりとこぼした。

「この造花って…… 確かアカシアっていう花ですよ」

鮮やかな黄色い花がいくつも集まり、花でありながらそれとはまた別の品を醸し出している。…… 母親が好きな花だった。

「おお、お若いのによく御存じで。そうです、アカシアの花言葉は贈り物としても大変良い物でございますので、こうして飾りに使うことが多いのです」

「花言葉……」

確か母親から教わった記憶はあるが、さすがにその時は幼過ぎおさなて憶えていなかった。

「御存知でない？ ならば憶えておくといいでしょう。花言葉は、優雅、友——」

「服の代金はいくらだったかな」

少し大きい声で財布を出した彼女に店主は遅れて対応をした。
今のやりとりが聞こえていなかったのだろうか？ まるでそんな風に彼女は会話を終わらせてしまった。表情はどこか強張っているが、感情の内容までは読めない。

もしかすると触れてはいけない話題だったのかもしれない。

「ああ、それとこの辺に良い宿はないかな」

「宿、ですか……。そうですね……」

店主は視線を宙に泳がせ、フードを脱ごうとしたメーネを慌てて止めたカルルを一瞥した。

「……私がついているところで言うと、三人では些いさか狭いかもしれませんが……」

「構わない。馬車の荷台より広ければ」

ほっほ、と老人は笑い。

「たくましいお人だ。木賃宿でよければ良いところを教えましょう」
代金を受け取って引き出しに仕舞うと、老人は机の木目を地図に見立てて説明を始めた。

花の帽子（後書き）

前書きで触れましたが、こう何度も落選を繰り返すとかかなり気が滅入ります。

構成？ 書き方？ それとももっと根本的な間違いがあるのか？
という具合に自信がなくなって参ってしまいます。

こういう時は寝るしかありませんね。おやすみなさい。いい夢を。

サーカスの男（前書き）

かき始める前にちょっとだけ寝たら頭が回らないこと回らないこと。

タイミングって難しいですね。

サーカスの男

「聞くところによると宿はこの先だそうなのだが……あれはなんだ？」

ケルンの目抜き通りにあたる街路の半分を塞いでしまうほどの人だかりができていた。中心から聞こえてくる威勢のいい声に耳を傾ける。

「さあさあ、寄ってらっしゃい見てらっしゃい！ セマード兄弟のサーカス団、近日公演だあ！」

「サーカス……？」

「兄ちゃん、外の人かい？ サーカスってな見世物小屋さ。一週間くらい前にここにやってきたんだよ」

カルルの疑問に近くに居た一人が答えた。

「今日はその挨拶だつてよ。ほらあそこ、見てみな」

商人風の男が指さした先に大きなテントが立ち並ぶ広場が見えた。どうやらこの場所が広場の入り口らしく、かなりの広さがあるようだ。長弓で矢が届くぎりぎりくらいかもしれない。

「あそこの中で演るんだとよ。なんでも、世界中から集めた珍しい動物や名人が芸を披露するんだそうだ。俺も見に行こうかねえ……でも母ちゃんがなあ」

「へえ……」

興味の色を示したカルルに代わってアカシアが言った。

「我々は先を急ぐのでな。残念だがまた今度だ。さ、行くぞカルル」

「……わかってますよ——」

カルルが荷馬車を進めようとした矢先、突如として人だかりから感嘆の声が上がった。そしてメーネが荷台の上に立ち二人を呼んだ。

「ねえ！ あれ！」

飛び跳ねるようにして人だかりの奥を覗こうとするメーネにつられ、カルルとアカシアも荷台に立って見渡した。すると人の向こう

には大きな鉄の檻があり、被せられていた覆いの布がたった今取り
払われたところだった。

檻の中には、

「さあ、ご覧ください！ 世にも珍しき『獣人』でございます！」

どよよ、と群衆がざわめき、檻の中のそれはさらに身をちぢこま
せた。

「耳が生えてるぞ」「あの尻尾、偽物じゃないのか？」「悪魔憑き
だ……」

人だかりからそんな声が上がリ、服の裾を握ってきたメーネの頭
を撫でた。

客の印象が芳しく^{かんば}ないと感じたサーカス団員は取り繕うようにこ
う付け加えた。

「あくまでこれはほんの『余興』でございます。我々はさらに奇妙
な、且つ希少価値の高い品々を保有しており、必ずや皆様には満足
して頂けることでしょう。——それでは、来たる開催日にお待ちし
ております」

と述べた後、再び檻に布が掛けられて広場に運ばれていくと群衆
も方々へと散っていった。

「……………」

「……………行くぞ。見世物小屋とはあんなものだ」

「はい……………」

カルルは散り散りになっていく人々にやりきれない感情を抱いて
いた。

少なくともカルルにとって獣人は獣ではない。同じ人間だ。

集まった人達は檻の中に入れられた境遇の少女を助けようまでと
はいかずとも、同情するどころか気味が悪いとまで口にした。

——この腹の底に渦巻く黒い感情は間違っているのか？

——そう考えることが異端なのだろうか？

奴隷時代、お前達は人ではないとよく言われた。

それとこれとに繋がりはなくとも、ただほんの少しだけ、言葉に

救われた気がした。

セマード兄弟がサーカスの公演会場として借り受けた土地には、大小様々な色鮮やかなテントが乱立していた。

広場の入り口ではつい先ほど団員が宣伝を始めたらしい。兄のセマードは遠眼鏡でその様子を窺っていた。

「フム、やはり獣人の反応はデカイな。まったく、イイ拾いモンをしたもんだ。あとはみっちり調教を……」

「兄貴イ〜。俺にも見せてくれよお」

「……お前は見なくていい。それよりネマーノ。さっき来てた客はなんだったんだ？」

「へ？ ああ、国境警備なんかのひとだって」

「警備隊？ なんでそんなヤツらが」

「あかしあ……とかいうやつがこの町に来るかもしれないから、見かけたら教えてくれって言って、帰ってった」

「アカシア？」

「それより兄貴イ、遠眼鏡返してくれよお。俺のだろお？」

風船のような体型の弟に迫られ、対照的に背が低く細い体の兄は一喝した。

「ああもう寄るな、暑苦しいンだよ、お前は！ ちったあ外でも走ってそのムダな肉を落としてこい！」

「ひでえや、俺が買ったのに……」

ブツブツ文句を垂れながら弟が居なくなると、セマードは再び遠眼鏡を覗いた。

「フン……アカシア、か。まさかあの糞ガキじゃあ……ない……？
——っげええ！？」

人だかりの頭の上、どこかで見たことのある顔が出ているではないか。

「ンナ、馬鹿な」

目をよく擦ってもう一度、遠眼鏡の焦点も確認する。

「疲れてンのかな……昨日寝るのが遅かったからかなあ……………」

……」

声は出なかった。驚きのあまり呼吸が止まっていた。

「あんの……っ！糞ガキじゃねえええかよおお！」

あの時より成長して顔つきも多少大人びてはいるが、見紛うわけがない。

消し去っていた忌々しい記憶の断片が蘇る。あれは奴隷商時代、
ようやく軌道に乗り始めていた時だった。

長い雨が上がって商品を次の町に急ぐ途中、人生最大ともいえる
不幸に出会ってしまった。

気が付いた時には苦楽を共にしてきた家畜用の馬車はこれでもか
というほどに打ち壊され、逃げていく奴隷達の背中を呆然と見つめ
ていた。

そして、土下座して懇願するしかない自分を見下ろすあの目。あ
れを今でも夢に見ることがある。

「なんでアイツがこんなトコに……ン？」

今のは？

一瞬、アカシアの隣に別の人間が現れた。派手な帽子を被ってい
る以外、ただの子供だろう。

だが、無駄に長く奴隷を買い、見世物小屋をするまでに成り上が
ったわけではない。

「あの娘っコ……獣人じゃないか？ そうだ、間違いない」

それは勘、でしかない。

だが、その直感こそが彼にとって何よりも幸運を授けてくれるも
のなのだ。

セマードは考えていた。

あの獣人が欲しい。

希少な獣人を二匹も持っていれば、宣伝効果もぐっと高くなるだ
ろう。それに芸ができなくなれば高値で処分することもできる。獣

人は金のなる木だ。

商売で培った頭をフルに回転させてセマードはあの手この手を思索した。

ならず者を雇って拉致するか？ ……いや、しばらくはサーカスという大所帯でこの町に留まる予定なのだ。すぐにトンスラできないのなら危険が大きすぎる。

ならば、それが互いに合意の上の『取引き』であれば？ 危険は限りなく抑えられる。

「取引き、取引か……」

遠眼鏡に飽きると彼は部屋の中を歩き回って落ち着かない気を紛らわせた。取引きとなると、やはり一番に出てくるのは金だ。

金を積んで買つか？ ……いや、それなら相手も相当に吹っ掛けてくるか、手放さないかのどちらかだろう。あまり美味しい結果は期待できない。

「どうするか……」

明らかに利益の天秤が傾いた取引を行うには、優位な立場を築くための材料を用意してやらなければならない。要するに相手の弱味を握り、足元を見るのだ。

しかしあの獣人は恐らくアカシアが連れていたものだろう。一筋縄でどうにかなる相手ではない。……いや、奴は今？

セマードの脳内に閃光が走った。

「ネマーノ！ いないのか、ネマーノ！」

「なんだよ兄貴イ」

息を切らせて弟がテントの中に入ってきた。

「国境警備の連中はアカシアを探しているんだよな？」

「そうだけど……どうしたんだよ兄貴、うれしそうだな」

「そうか。そんなに嬉しそうに見えるか」

「ああ。兄貴は笑うとやっぱり小物っぽく見える」

「やかましっ！——とにかく、俺はこれから作戦を練る。お前は獣に芸でも仕込んでろ」

「ああ、それで思い出した。やっと玉乗りができるようになったんだ」

「なに、本当か。トラか、それともサルか？」

「俺だよ兄貴イ。コツは前から掴んでただけどさ、昨日やっと乗れるようになったんだよ」

「……………、——ほんつとに、お前はあつ！ バカだなあつつ！！」

広場の入り口まで届きそうな大声でセマードは怒鳴った。

にもかかわらず、彼が連れてきた獣の中でその声に驚くものは居なかった。もはや慣れた

騒音とばかりに草を食んでいた馬も、眠たそうに欠伸をしたただけなのであった。

不穏な影（前書き）

描写がものすごく上手い人ってなんなんですかね……飽きないし
読ませられる、というか。ちょっとわけてほしい。

不穩な影

「なんだ、わりと良い部屋じゃないか」

安い割には、という言葉が省略されている。

服屋の店主に紹介された宿を訪ねると、二階の最奥、煙突側が空いていると案内された。

部屋に入るとアカシアが何気なく部屋の木窓を開き、そこから見渡せる大通りを行く人々を見下ろして言った。

「……いいな。こういう旅を試してみたかった。木賃宿に泊まるのも楽しみの一つだったんだ」

「木賃宿？」

「ああ。格安の料金で泊まれる仕組みの宿のことをそう呼ぶんだ。

途中に大部屋があつただろう？ あそこの暖炉で火を借りて持ち寄った食材を料理できる。毛布なんかも自前の場合が多いから、本当に薪代だけの金で泊まらせてくれる。旅にはもってこいの宿さ」

とても楽しそうに話すアカシアに一抹の疑問を抱き、カルルは首を傾げた。

「泊まったことがないのに……随分と詳しいんですね」

そう訊ねると、ふふんと笑みを浮かべながら頬杖をつき、遠い目で呟いた。

「……いつかは旅に出ると決めていた。まあ……こんな形になるとはな。探す手間は省けたが」

「………？」

その言い回しに興味を持つ前に、カルルの裾が小さな手に引つ張られた。

「ねえ、お腹すいたよ……」

「……飯にするか」

アカシアがそう言い、断る理由もなくそれに賛同した。

大部屋のある下の階に降りると、他の宿泊客の姿もちらほらと覗^{うかが}

え、それぞれがまばらに思い思いの場所に腰を下ろして湯気の立ち昇る皿や鍋を囲んでいた。

メーネがもの欲しそうにそれを見つめるのを注意し、石釜が複数集まったような造りの暖炉の近くに場所を取った。

食材は宿に来る途中で買った野菜が主だ。アカシアが慣れた手つきでナイフを使いタマネギとジャガイモを切り分け、カルルは指示された通りにキャベツの葉を千切って鍋に入れていった。

まともな料理などやったことがないカルルにはすべてが新鮮だった。

「これを水で煮るだけで美味しくなるんですか？」

まさか、とアカシアは笑うと荷物から小瓶を取り出した。

「茹でるだけでは料理とは言えないぞ。味付けは偉大な発明だ。――そこで、これを入れるわけだ」

「それは？」

小瓶の中身は粉末らしい。薄茶色のそれを鍋にふるうと芳ばしい香りが湯気に混じって鼻腔をくすぐった。メーネがそわそわと落ち着かなくなる。

「牛や鳥の骨から取った煮汁を乾燥させてな……それを粉状にして香辛料を加えた調味料だ。これを溶かせば水もそれなりのスープになる。携帯用としては少し高価だがな」

最後に口元がやや吊りあがったのは、おそらくそれも砂糖のようにどこかから失敬したものだからなのだろう。その強かさは見習いたいものだと思った。

「たしかに美味しそうですね……」

粉が溶け出して琥珀色の澄んだスープに喉が鳴った。

「これをそうだな……十五分も煮れば芋も柔らかくなるだろう。それまでは……は——はつぶしゅ」

地声より随分と可愛らしくしゃみに近くに居た数名が振り返った。

「んん……寒気がしてきた」

「風邪ですか？」

「かもしれない。でも気にするほどではない」

「……………。先にメーネと部屋に戻っててくださいよ。鍋が煮えたら持っていきますから」

暖炉の火があるとはいえ、他の宿泊客の手前いつまでもそこに陣取っているわけにはいかない。他人の気を遣えないものは他人からも軽く扱われる。

そんな何組もの旅人が鍋を囲める広さの部屋の温度は寒い。ここに居るよりは部屋で毛布を羽織っているほうが幾分体にも優しいだろう。

「……………すまない。そうさせてもらう。メーネは？」

「うん、私も。にいちちゃんも早く戻ってきてね」

「ああ」

二人が居なくなり、カルルは暖炉の前に腰を降ろして待つことにした。

火の通らないジャガイモにカルルが二度目のフォークを刺した時、後ろから知らない声に話しかけられた。

「美味しそうな匂いですねエ」

「？」

カルルが振りかえるとそこには旅人とは思えない身なりの男が立っていた。カルルより小柄ではあるが、年は三十路の半ば頃だろうか。真つ黒のぴしりとした一張羅はこの木賃宿ではかなり異質な存在だった。それとなく周囲の視線を感じる。

「おっと、これは失礼しました……。わたくし、こういう者でございまして……………」

男が差し出した紙には『セマード兄弟のサーカス団』という見出しが大きな文字で書かれ、近々見世物小屋を開催するという旨が記されていた。

「これは昼間の……………」

「ええ、そうです。宣伝をご覧になって頂けたようで、なによりで

す」

この男の笑顔は信用できないとカルルは頭の隅で思った。

「つまりあなたは……？」

「ええ。お察しの通り、長男のセマードにございます」

どこの誰かは分かったものの、一番重要なことがわからない。

変に勘繰るより、単刀直入に聞くことにした。

「それで、何の用でしょうか」

笑顔は崩さず、それでも逡巡^{しゅんしゅん}していたのであろう間がややあって、

「ええ……実は先ほど部屋に戻っていった方のことで、気になることがございまして」

「……気になること？」

それがちょうど鍋をかき混ぜている時で良かった。顔を合わせたまま話していれば、確実に今の表情を読まれていただろう。

ただ、思わず止まった手を見てセマードが何を思ったかは容易に想像できた。

「ええ。私共はサーカスという生業ですから、珍しいものには目が無いのです。……あの御嬢さんの腰巻はまるで生きているような毛並でした。ああいうものこそ、私共が探し求めている素材なのです」
「……素材？」

どうやらこの男が言っているのはアカシアではなく、メーネのことらしい。しかもメーネが獣人であることに気づいているかのような口振りである。

「ええ。言い換えれば生まれ持った才能……。そして、それを活かさないということはとてももったいのないことでございます」

隣に座ると男は話すのを止めた。カルルの反応を確認するように商売臭い笑顔を向けてきている。

「……何を言いたいのかがよくわかりませんね」

興味なさそうにそう返した。胸中では嫌な胸騒ぎが収まらないでいたが、ジャガイモの硬さを確かめるふりをして平静を装った。

「……つまりですね。御嬢さんを是非とも、我がサーカス団に迎え

入れたいということでありまして。……如何でしょうか？」

「興味ありませんねえ」

考えるまでもなく、そっけない返事を返したがやはり喰らいついできた。

「そうですか……。——ですが、彼女のような小さな子ならきつとこういうものは好きはずですよ？　まずは本人にも聞いてみようではありませんか」

セマードの喋りの巧さには多少の感心はしたが、場慣れしている相手にこれ以上関わるのはやめたほうが良いと判断した。

「いえ。自分達は旅を急いでいるので。メーネもそれは理解しているはずです。——じゃあ」

鍋を持つとカルルは立ち上がり、その場を去ろうとした。

「先を急ぐ旅……それもそうでした。追いつかれてはいけませんからねエ。あなた達は」

危うく鍋を落とすところだった。

「おや、どうかしましたか？」

「……………いえ」

「では、私もそろそろ失礼しますよ。メーネちゃんと騎士様に、どうぞよろしく願いますね」

そう告げると、セマードは黒の縁帽子を深く被り直して大部屋を後にしたのだった。

「……………騎士様…………？」

その言葉の指すところが彼女以外に思い浮かばない。

ただ、彼女はケルンに着いてからはずっとあの格好しかしていない。だからその言葉は有り得ないはずのだ。——あつてはならないのだ。

不気味な胸騒ぎを覚えたカルルはなるべく急いで二人の待つ部屋へと戻った。

「セマード？」

「ええ。……お知り合いですか？」

カルルが鍋を置くや否や、器によそい始めたアカシアが答える。

「セマード……どこかで聞いたことがあるかもしれない。……なんだったかな。——で、その者がどうかしたのか？」

「あ、いえ……」

話すべきだろうか。アカシアのことを知っていたのは偶然としても、メーネの件を加味するとそれにつけ込んだ脅しのようにも取れる。

獣人を渡さなければ、アカシアの存在を告発する。

考え過ぎであつて欲しい。

「ならいいんです。別に大した用があるわけでもなかったので」

「そうか……。まあ、なら食おう。せつかくのスープが冷めてしまふ」

その晩、カルルはなかなか床に就くことが出来なかった。

『メーネちゃんと、騎士様に……』

メーネの名前はカルル自身が口にした。だが、騎士様と言った時のあのセマードの笑みが頭から離れない。

「……………」

あのサーカスのオーナーである男。

昼間の宣伝に使われていた獣人の少女の様子を思えば、とても善良な……とは言い難い。

奴がアカシアの弱みにつけ込んだ取引を要求してくる可能性は否めないだろう。

自分はそういう汚れた取引をこの目で何度も見てきた。その度に八つ当たりをされた身としては余計に嫌悪の念を抱いてならなかった。

「眠れないのか」

アカシアの声に首をむけた。

「……ええ」

ベッドは窓際に一つ。カルルだけ床に毛布を敷いて横になっている。ベッドの上で半身だけ起こしたアカシアの顔が、暗闇の中で月の燐光を浴びていた。

「今後のことで悩んでいるのか？　だとしたら仕方ないが」

「……」

「それとも、床が寝辛いのならお前もこっちにすればいいぞ？」

「いえ、そうじゃないんです。……ちょっと考え事を」

「……そうか。あまり一人で抱え込むなよ。相談してくればなんでもするからな」

「はい。その時は……よろしく願います」

会話が途切れると、程無くして穏やかな寝息が聞こえてきた。

カルルももう考えるのをやめて、早く眠ることにした。

ケルンに入り、もう国境は目の前なのだ。セマードが何か行動を起こす前に国境を越えてしまえば問題はない。

そう納得させ、安心することでカルルもようやく睡魔に身を委ねることができそうだった。

出口無き三日（前書き）

あきらかに日によって頭の回転速度が違うのってなんでしょうね。
今日はいつもの三倍は掛かってしまった……。

評価してくださった方、ありがとうございます。とても励みになります。

出口無き三日

夜が明け、昨夜のスープで手早く朝食を済ませた三人は宿を引き払うとすぐに国境を目指して荷馬車に乗り込んだ。

町の中心の大通りに沿って進めばそのまま国境にぶつかるので、広いケルンといえど迷うこともなく昼前には関所となる大門に着くことが出来ていた。

しかしここで予想していなかった問題が起きた。

「み——三日だっ！？ なぜそれほど待たねばならないのだっ！」

「あ、……落ち着いて」

アカシアから人前では名を呼ぶなと言われていたのを思い出した。受付に身を乗り出す彼女をカルルはどうととなだめる。

ここはローデリアとアリシル圏の境となる国境施設だ。自然、警備隊の詰所が目と鼻の先にあり、国に追われる身という事情のもと、絶対に揉め事を起こしてはいけない。

声を荒げていたアカシアも周囲の視線に気付くと体を引き、口調を改めた。

「……いくら入国にあたる審査が厳しく、混んでいるとはいえた。三日というのは聞いたことがないのだが」

なるべく穏やかで丁寧に言い直したが、それでも今の怒号にすっかり萎縮してしまった係りの者はもう彼女を相手にまともに会話はできそうになかった。

「う、上の者を呼んで参りますので……っ」

と言つて逃げるように居なくなってしまった。

仕方なくその場で待っていると、程無くして落ち着いた雰囲気、男が連れられてやってきた。

「私が相談を承ります。どうぞこちらへ」

男はローデリア側への出口とは別のほうの廊下を歩き始め、商談

用だという部屋へと通された。

「どうぞ掛けてください。いまお茶を持って来させますので」

そこはインクの混じった嗅ぎ慣れないカビ臭さが目立った。メーネには辛いだろう、と見れば嫌そうな顔をしつつもそれ以上の興味に忙しいようである。

「本がいっぱい……」

行儀が良くないとわかっていながらカルルも思わず見回してしまふ。

壁という壁には背の高い棚が並び、ざっと見渡した中には書類の束や様々な種類の天秤などが納められていた。あれらも商談に使うもののだろう。

窓は一か所だけ高いところにあるが、それ以外には壁と扉しかない部屋だった。本棚が無ければ牢獄のように感じて息が詰まってしまいそうだが、そういう趣向なのだろう。

「夕刻を過ぎるとすぐに日が入らなく暗くなってしまうので、昼間しか使えないのです。かといってランプが必要な時間にわざわざ商談をすることもないのですがね」

部屋を観察していたカルルに男が丁寧な口調で説明した。昨日のサーカスのオーナーのそれとは雲泥の差を感じさせる爽やかな笑みだった。

「申し遅れました。私はケルン国境警備隊長、ラダンと申します。先ほどは部下が失礼をしたようで……大変申し訳ありません」

頭を下げる責任者に追い打ちをかけるほどアカシアも聞き分けがないわけではない。

「う、うむ……。いや、こちらにも非はあったのだ。状況故に気が急いってしまったらしい。こちらこそ申し訳ない」

「いえいえ。……して、部下からは入国審査にかかる日数のことで揉めたと聞いておりますが」

「む。ああ、そうなのだ。審査に三日、というのは如何様なものなのだろうか。できればその内訳を説明してもらえないものか」

「それはですね……」

ふーっと長い溜息を吐くと、ラダン是不快感を与えない程度の疲れた表情を見せた。

「最近、アリシル国の王位が移ったという話はご存じでしょうか？」

「ああ。亡き王の実子である王子が引き継いだと聞くが……」

「その噂が流れるようになってから、我々の仕事が急激に増え始めました」

ふむ、と考える素振りを見せてからすぐにアカシアが顔を上げた。

「……亡命？」

「大げさに言えばそうです。ただの旅行目的ならば一時的なものですので、審査も軽いもので済むのですが……。大半が移住願いを……はあ」

新しく王になる元王子がそれだけ国民に期待されていないという意味である。若すぎることで、そして消極的な性格が王として不向きだと前々から言われていたことだった。

「それで時間がかかっている？」

「ええ……。他国の人間をローデリアに迎え入れるわけですから、

審査も、私共の責任も、言葉通り倍増することになります」

「なるほどな。となると……どうしたものか」

憂いのもと怪鳥だ。

アリシルの手が及んだ町で三日もの時間を過ごすのがどれほど危険であるかということはカルルはもちろん、メーネにも理解できる。アカシアと共にいる以上、カルルもメーネも同等に追われる身なのだ。

「参りましたね……」

おまけにカルルには宿での一件もある。

あのセマードという男の別れ際のセリフ。奴が今後もしつくく取引を持ちかけてくる気がしてならなかった。

「移住ではなく、旅行目的での入国ならばもう少し早くできるのか？」

「……。なにゆえ先着順なものですから。どちらにしる現在の申請の処理が終わらない限りは、ということですよ」

「……そうか、無理を言ってしまったな」

アカシアが席を立とうとすると、窓の外を見ていたラダンが独り言のように言った。

「宿を探すのなら、警備隊舎の近くをお勧めしますよ。最近、物騒な噂が広まっているようです」

ガラス越しの青空に向いていた彼の目が、反射した三人の姿を見ていたことに気付いていたのはその張本人ひとりだけだった。

「……本当に三日間も隠しきれでしようか」

関所から出た三人の足取りは重い。

御者台の隣にアカシアが乗るのを手伝いながらカルルは不安を漏らした。

「やり通すしかあるまい。私もなるべく宿からは出ないようにして過ごす。あとは申請に書いた嘘がばれないように行動するだけさ」

入国審査に必要な手続きとして、三人は出身地と目的地、及びその概要を書面に書く必要があった。それに加えて記入の嘘偽りがないことを謳った誓約書に手形を押し、申請自体はそれで完了した。

出身地の評判があまりにも悪かったり、地図にも載らない僻地^{へきち}だったりすると審査で弾かれ易くなる。また、後々に虚偽が判明した際には、利き腕の切断刑という重罰が待っているのだ。

「まあ、嘘と言っても名前を書き間違えた程度では大した問題にはならんよ。よくあることだ」

厳正な書面にアカシアが平然と偽名を書くので思わず指摘してしまいそうになり、それを誤魔化すためにおかしなことを口走ってラダンに変な目で見られたのは今でも顔から火が出そうになる。

「……もう少し、嘘が上手になりたいです」

肩を落としてカルルは荷馬の背中に視線を落とした。

「嘘を吐くのが上手になると、今度は素直になることを望むようになる」

大きな欠伸だった。

そんなもんですかね、と口にしながら宿の看板を探していく。
一応、ラダンから荷馬車の泊められる宿を紹介されてはいた。だがそれに甘んじてしまえばこちらの居場所を教えることになる。

もし申請が通るまでの間に素性がバレてしまい、それでいて向こうが紹介した宿に泊まっていたなどという事態になれば、間抜けすぎて余計に勘繰られるだろう。

なのでやんわりとラダンには遠慮をし、自力で宿を探すことを決めて今に至る。

「前の宿はここからだといかんせん遠いからな……。紹介された近場の宿も除くとなると、やはりそうそう見つかるものではないな……」

その時くう、という音が通った。

「ん？」

「……お腹すいた」

「そういえばもう昼だったか。宿の前にどこかで昼飯にしまおう」

特に人が多い目抜き通りに沿って移動していただけに、すぐにくつかの食堂が見つかった。

ただ、味に自慢のある店が大通りに集まるのであり、表に置かれた品書きの値段は決して安いとは言えないものばかりだった。下手をすると三日で所持金のほとんどを使い切る羽目になるかもしれない。

「……うーむ」

財布の中を覗きながらアカシアが唸る。

「ねえ、ここじゃダメなの？」

空腹に急かされたメーネが要求するが、それはカルルに阻まれた。
「ま……まあ、途中の広場にも屋台が並んでましたし、そこで済ませてもいいんじゃないですか？」

「うーむ……」

アカシアの葛藤が続く。少しくらいなら……それに年下に気を遣われることに対して意地を張りたい気持ちもある。

「三名様ですか？」

「え？ あ——いえ、結構です」

答えたのはカルルだった。

いまだ決断のできないアカシアを「こういうところは落ち着いてからゆっくり食べにきましようよ」と渋々ながらも納得させて荷馬車はもう少し先の広場へと車輪を回していった。

路地裏の便利屋（前書き）

日付が変わってしまった……orz

路地裏の便利屋

やっぱり美人は得をするように出来ているのだ。

注文を付けに行つてからやけに長い談笑の後、大皿に乗った山盛りのミートパイと、頼んでいない三つのコップを受け取るアカシアを見つづそんなことを思った。

三人掛けの小さなテーブルにごとりと大皿を置くと、アカシアからコップを渡された。

「これはおまけだそうだ。酒ではないからメーネも大丈夫だろう」

メーネはコップを受け取ると鼻を近づけ、すぐに人より敏感なそれは香しいものだ判断した。一気にコップを煽り、天を仰ぐほどに目尻が下がっていく。

「……おいしい」

「全部飲んじゃったのか……そんなに美味しいのか？」

カルルも口をつけ、すぐにメーネと同じ反応をした。

「うまい……なんだこれ」

今までに味わったことのない甘さだった。どろりとして多少喉に引っかかる感じはするものの、牛の乳とかなり相性がいい果物の飲料らしい。

「遠い南の地方にしか根を張らない珍しい果実だそうだ。半年に一度、行商隊の馬車が売りに訪れるのだが、通り過ぎて三日もすると売り切れてしまうほど人気があるのだと」

ふーっと空のコップを置くと、アカシアはフォークを持って苦笑いをした。

「しかし、確かに大目に盛ってくれとは言ったが……この大きさはすごいな」

その大皿の二枚分はあるのではないかというくらいに巨大なミートパイである。向かいに座るメーネの頭がすっぽりと隠れてしまう。「まあ、食い切れなかったら適当に包んで持ち帰ればいいだろう」

そう言つて、ナイフを一番先に入れたのはアカシアだった。

「……それで、宿の件だが」

半分ほど残ったミートパイを前に、もうフォークを取ろうとする者は居なかった。

「さつき屋台の親父から聞いた話だ。友人に便利屋をやっている者が居て、どうやらそこで泊まらせてもらえるかもしれないらしい」

食後のお茶を優雅に啜り、ふうと一息吐いたのはアカシアのみ。

「便利、屋？」

喋ろうとするとげっぷが出てしまうカルルはまだ良いほうで、メーネは椅子二つを並べ横になって苦悶の表情を浮かべていた。

「すみません、どうしても——げふ」

「ああ。聞いてくれるだけでいい」

何だかんだで一番食べていない張本人はお構いなしに続けた。

「場所は近い。ただ、ちょっと入り組んだ路地の中だそうだから迷うことも考慮して早めに行こうと思う。断られるということも有り得るからな」

そういうわけで、重い腹をこなす暇もなくカルルは再び手綱を取ったのだった。

大通りは石畳でしつかりと舗装されてはいても、やはり裏路地まではそうはいかないものだ。むしろ荷馬車が通れるだけの道幅があっただけでも幸いと考えることにした。

それに治安もあまり良いとは言い難い。建物の影で昼間でも薄暗いそこでは常に気を張って居る必要があった。

道の端に座り込んでいる老婆は俯いて何事かぶつぶつ呟き、目の前に置かれた茶碗には真っ黒に錆びついた銅貨が一枚だけ入っていた。

「書いてもらった地図ではこの辺りのようだが……」

首を左右に見渡すも、件の便利屋らしきものは見つからない。と

いうより便利屋とはどんな佇まいなのか。その辺を詳しく聞いて置くべきだったと後悔し始めた時だった。

「ここには面白いものなんかないぞ」

しわがれた、それでいてよく通る質の声に三人はふり返った。

音もなく荷馬車の後ろに立っていた初老の男は続けざまに言い放つ。

「大通りからはぐれたのか？　ここはあんたらみたい人間が来るところじゃあない」

戸惑うカルルに代わってアカシアが御者台から降りて歩み寄った。「広場で屋台の親父から、この辺りに便利屋というものがあると聞いた。貴公は御存知でないか」

「……便利屋？　そんなところになんの用だ」

「屋根を借りたい。屋台の主人がそこと知り合いだということで紹介の手紙ももらっている」

ほんの一瞬、明らかに面倒臭そうな顔を見せてから男は仕方ないと呟いた。

「……あんたらが探している便利屋はここだ。ほら、看板もあるだろう？」

言われて注視しなければわからないほど文字の薄れた板切れ、ではなく看板。「便利屋」の文字が読めなくもない。

そんなものが老婆の真後ろにあつたとなれば、尚のこと気付かなくて当然である。

「ばーさん。俺はたしかに悪戯されないように見張っててくれたら駄賃をやると言ったがな、あんたがそこにいちやあ客まで寄り付かなくなるだろう」

すると顔を上げた老婆は聞き取れない声をもごもごと返した。

「……はいはい、わかったよ。ほら」

茶碗に二枚目の銅貨が落ちる。真つ黒い錆だらけのそれを老婆は宝物のように拾い上げて懐にしまった。もしかすると一枚目の銅貨は見えていなかったのかもしれない。

「とりあえず中に入ってくれ。立ち話はろくなことがない」

灰色の印象を受ける路地とは違い、建物の中は意外と小綺麗なものであった。

「それで、宿だったか？　うちは高いぞ」

机の引き出しから取り出した葉巻を咥えると男はカルル達に椅子に座るよう促した。

男は決して身なりが良いとか、品性があるという雰囲気ではない。それでも仏頂面でふかす葉巻はよく似合っていた。

「三日間、泊まらせてほしい」

「三日、か……。それは構わないが、飯はどうするつもりだ？」

「できれば台所も貸してもらいたい。食材は自分達でなんとかする」

「そうか……。ならいいだろう。だが条件がある」

「？　なんだろうか」

「俺の飯も作ってくれ。それでいいなら家賃はそこらの宿よりは安くする」

その後、男から簡単な説明を受けて『便利屋に宿泊』の契約は成立した。こんな楽な仕事も無いかと男は笑っていた。

その後三人が案内された部屋はその建物の二階部分にあたる場所で、もとは屋根裏の倉庫か、少なくとも部屋として使うために作られたものではないようだった。

「ああ、それと俺の名前はクラストだ。なにか困ったことがあれば言ってくれ」

「わかった。クラストだな。これから世話になる」

「なに、紹介状にはツケの催促を待ってやると書いてあったんでな。安いもんさ」

そう言い残してクラストは一階へと階段を降りていった。

「なあ、二人とも」

普通の部屋とは若干作りの違う屋根裏部屋とは子供心をくすぐるものらしい。屋根の形に沿った天井や入り組んだ梁と柱は確かに見慣れないものだ。カルルとメーネはさつきからそればかり観察して

いる。

「とりあえず荷馬車の荷物をこっちに運ぼう。手伝ってくれ」

三人が下に降りるとそこにはバツの悪そうな顔をしたクラストが待っていた。

「……すまん。やられた」

「? どうした、なにか問題でも」

「俺も少しくらいならと油断したのが悪かったんだ。あんたらの荷馬車、食料がごっそり盗まれてる」

「な……」

「この辺じゃよくあることだが……俺の責任もある。まずなにが盗られたのか、無くなったものを確認してくれ」

「……さっそく洗礼を受けたか」

肩を落としてアカシアは笑った。彼女にとってこういうことは初めてではないらしい。

幸い、盗られたのは食料だけだった。毛布など日用雑貨が手付かずなことを不思議がっていると、クラスト曰く「身寄りのない乞食の子供がやったんだろう。余裕がないから一番に欲しい物しか盗っていかない。大人なら荷馬車ごと消えている」とのことだった。

それを聞いて無意識にメーネの頭に手を置いていた自分が、子供の境遇に同情しているのだと気付いた。

「まだ近くに居るかもしれない。すぐ探しに——」

「きつと無駄ですよ」

「……カルル?」

「腹が減って盗んだものを大事に取っておくわけがありませんよ。

逃げたと思えばすぐに食べちゃうんじゃないですか」

「むう……それもそうか」

——まったく。

自分は誰の味方なのだ。

戒めて、こんなことはもうこれっきりだと固く誓った。

自分達も生きなくてはいけないのだから。

「また買いにいくしかないですね。先に荷物を移してから、僕がいつてきますよ」

「すまんなカルル」

「いえいえ」

運び手が四人ともなれば、荷物も二往復ほどですべて運び終わることが出来た。

「また用があつたら呼んでくれ。できる限りのことはしよう」

クラストが居なくなり、カルルが「さて」と立ち上がった。

多少埃っぽい二階だが、真新しい服からは良い匂いがする。自分の荷物から必要なものを取り出すとカルルは二人に買い出しに行くことを告げた。

「じゃあ、任せたぞカルル」

「気をつけてね。にいちやん」

「ああ、いつてくるよ」

最後にもう一度メーネの頭を強く撫で、カルルは踵を返した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6273w/>

草原の歌に花言葉を

2011年12月7日01時59分発行